の独眼竜に仕えている右目と紅の鬼そして・・ある衝動そして罠？にかかり異世界から飛んでき

Natu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
戦国ＢＡＳＡＲＡで奥州の独眼竜に仕えている右目と紅の鬼そして・・ある衝動そして罠？にかかり異世界から飛んできたワカバ組。

【Ｎコード】
Ｎ２９２７Ｑ

【作者名】
Ｎａｔｕ

【あらすじ】
時は戦国時代。此処には天下に名乗りを上げた一匹の竜がいた。（ＳＡＭＵＲＡＩ　ＤＥＥＰＥＲ　ＫＹＯの鬼眼の狂も此処に入れさせていただきますのでご了承を・・汗）
奥州の独眼竜と呼ばれた伊達政宗である。そしてその竜に仕えている男達がいた。１人は竜の右目と呼ばれた片倉小十郎。そして紅の鬼と呼ばれた鬼眼の狂である。

そしてその戦国時代に何と・・・ある衝動そして罠？にかかり現代から此処戦国へと飛ばされたワカバ組。そのワカバ組と呼ばれた者の名は嘗て闇の始末屋炎龍（エンロン）そしてワカバリーダー兼幹部の橘夏美。そして死女（シジョ）と呼ばれた夏美の馴染みでありまたワカバ副リーダー兼幹部であるライカ・ネアン。そして夏美の一応側近である狭川メグナそしてその他が・・・時を越えてきてしまう。

そして・・・・彼女達もまたこの戦国の世で各々の戦国の世で己の新たな？宿命（サダメ）を見出すのであった。

と同時に夏美には‘秘密が’あった。ライカ達以外には知らぬ‘秘密が’・・・。

その‘秘密も’此処で解き放たれる事となる。

必読。（お手数ですがお読みください）（前書き）

はい・・有難うございます。懲りずに新作です（笑；；）

今回はですね・・・ワカバ組が今度は戦国時代へと参ります。

後基本的に私の小説はコラボが多いいです。苦手な方はご遠慮頂ければと思います。また基本的に私の小説は全部の小説ですか・・今の所ワカバ組が必ずッて言って良い程出てくる可能性も大でございます。

同じキャラが出るのは嫌だな？と思う方々もお退き頂く事をお勧め致します。

必読。（お手数ですがお読みください）

今回は、主に戦国ＢＡＳＡＲＡとＳＡＭＵＲＡＩ　ＤＥＥＰＥＲＫＹＯのコラボになる恐れがあります。

ですが・・・！！！！今の所鬼眼の狂さん以外出さない予定であります。

尚、予めお断り致しますが、作者は原作を持っておりません汗。古本屋で立ち読みした程度でございます。

それ故多少口調等そしてもしかしたらオリジナル技？が出る可能性もセリフももしかしたら間違える可能性も大いにございます！（汗）

立ち読みして狂さんがあまりにもかっこよくて思わず出させて頂きました笑；；

その辺はどうぞお許し下さい。

尚一応原作では下僕扱いされるのは嫌いみたいですが・・此処では狂さんが奥州伊達軍の一員として

働いている設定です。色々と性格等で意気投合して政宗さんに気に入られて・・入隊ってね。

後は片倉さんとも（伊達軍一同共。因みに狂の兄貴と呼ばれています笑（今の所の呼び予定））

其れが嫌な方はその場で何度もくどいようで申し訳ございませんがお退き頂く事をお勧め致します。

尚苦情等は他の小説と共に一切お受けいたしませんので暖かい目でご覧いただければと思います。

この小説もゆっくりではありますが時間をかけてまでも更新完結目指して参りたいと思います。

どうぞ宜しくお願い致します。

此処までご覧いただきありがとうございました。

必読。（お手数ですがお読みください）（後書き）

有難うございます。有難うございます。此処まで御付き合い頂いて。

次回からは話に移りたいと思います。

其れではＮａｔｕの戦国ＢＡＳＡＲＡの世界？をどうぞお楽しみ頂ければと思います。

有難うございます。

第1章。プロローグ。（現代から戦国へ！？）（前書き）

今章は主にですね。ワカバ組がなんと現代から戦国へとなだれ込んで行く事を書かせて頂きたいと思っています。

尚、戦国でも、異世界の事は何故か知りませんが耳に入っています、笑

長丁場の編集可能性ありの予定です。

因みに狂さんは何故か政宗さんの事「筆頭」ではなくて「伊達の大将」と呼びます笑

後伊達のオリキャラクノ一か忍びも出てくる予定です。

第1章。プロローグ。　（現代から戦国へ！？）

此処は２０ＸＸ年の東京。

其処でライバルである広州との‘対決’を相変わらずし続けていたワカバ組。

お互いに血飛沫が舞いそして広州の戦に出ている連中をし止めようとした次の瞬間・・・・。

行き成り夏美達の下に大きな穴が空きそしてその空間へといざなって行かれた。

前を向くと手で印を組んでニヤリと笑っている広州の隊員がいた。

夏美達はそれを見てしてやられたと思い何もするすべもなくその場に只吸い込まれていった。

其れを見た美零が己の主の名を呼びながらその空間へと乗り込んで行った。

そして・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

此処は時が代わって戦国時代。

此処は奥州の南西部のある所。

此処では奥州伊達軍が陣を敷いてきてそして毎度おなじみの武田軍の真田幸村別働隊が攻めて行って来ていた。

すると遠目で1人の黒の着流しを来た黒短髪の男が陣から少し離れて真田別働隊の様子を見ていた

と同時に紅いのを確認しククと笑い「どうやら来たみてぇだなァ。」と同時に「政宗殿ォォォ!!」と

叫び声が聞こえる。

するとその男は陣営の中に入り「どうやら・・おいでなすった見てェだぜ？伊達の大将？」

其れを聞いた政宗はニヤリと笑い六爪を構えつつも「Ｏｋａｙ！！！」と同時に「Ｔｈａｎｋ' ｓ」とさらに続けて「小十郎。そして狂とりあえずお前等は軍の連中とと此処で待機。何かあったら頼むぜ？Ｙｏｕ　Ｓｅｅ？」

小十郎は一礼し「ハ！」

狂も頷き「あァ。了解した。」

そう言い政宗は陣から出て「Ｈｅｙ！待っていたぜ！！真田幸村ッ！Ｌｅｔ' ｓ　Ｐａｒｔｙ！」そう言い六爪を抜いて幸村を迎え撃った。

狂はそれを見てククと笑い「相変わらず暑いぜ。うちの大将と真田の野郎。」そう言いながらキセルに火を灯す。

小十郎もそれを聞いて苦笑いをして「そうだな。」

すると見張りで行った1人の忍びが戻って来た。

小十郎は気配を感じ「・・・・愛海(あみ)か？」

愛海と呼ばれたのは忍びではなくクノ一伊達主従の専属？で名は安(あ)達川愛海(だちかわあみ)

愛海小十郎に一礼し「・・片倉様。報告が。」

小十郎はチラッと見て「おう。聞こう。」

そして見回りをしていた時の事をすべて話した。

愛海険しい顔しながらも「・・・‘信じ互い話なのですが此れが事

実でございます。’」

小十郎腕を組みながら「・・‘異世界から来た者達’か。」

狂もキセル吸いながらニヤリと笑い「でもよ・・片倉の副大将。実際に‘巷の噂では流れているんだ’

。‘普段は信じがたい話だろうが・・’。‘たまにはこういう生粋話も信じてみて良いんじゃねェか？’」

小十郎も其れを聞いて両目をつむりながらフッと笑い「・・そうだな。」

すると遠くからすごい音がした。

と同時に「待ちやがれェェコラァァ！！！」とか「舐めてんじゃねェぞ！！小娘どもがァァァ！！」

と罵声が飛び出ていた。

そして「小娘だからってな・・舐めてんじゃねェぞ！！此れでも私しゃァ等は２２だい！！！」

「れっきとした成人だい！！！」

「今夏美様を、小娘扱いした奴前に出ろ！！今すぐにだ！！！，」

「ヤベッ！美零の姉さんが、撲殺、に！？笑；；あァ。私しゃァ様知らないもんねェ～。」

そして「単なる小娘だと思うなよ？翡翠流爆龍烈風弾！！」

「ちぃくしょう！！、飛ばされた途端トラブルかよ！，、花鳥の舞いよ！死の舞いよ！，、舞えよ！！

花鳥氷龍派！！（かちょうひょうりゅうは）！！」ドカカカン。と音がした。

すると伊達の見張り兵が「片倉様！！狂の兄貴様！！筆頭が先程真田幸村と共に音がした方へと向かわれました！！」

小十郎はそれを聞き「なんだと！？まったく・・あの方は。」と頭を抱えた。

狂はキセルを再度口に加え直しクククと笑いながら「まァ・・良いじゃねェか。片倉の副大将。」と続け様に見張り兵に「で？伊達の大将から何か指示は？」

見張り兵は狂に「ヘイ。その音がした方向に向かうようにと。」

狂はそれを聞いて頷き小十郎に向けて眼で合図した。

小十郎も頷き「てめェ等！！政宗様のご命令が出たぞ！！気合入れろや！！！」

伊達軍一同「Ｙａｅｈ－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－！」

狂もククと再度笑い「こりゃァ楽しくなりそうだな。」そう言い村正を持ってその場所へと向かおうとした。

一方、政宗は幸村と共に小十郎達と共に一足先にその場についていた。

政宗はそれを見て口笛を吹き「～♪あのｇｉｒｌ達やるじゃねェか。」

幸村も驚いていた。

その光景は異世界から来た夏美達が何とあの・・・石田軍を相手取っていたのだ。

石田軍兵士1「な、なんつう・・連中だ。」

石田兵士2「くそ！此れじゃぁ三成様に顔向けできん！！たかが・・小娘共に・・・。」

夏美タバコに火を灯し「・・‘あまり甘く見ねぇ方が良いよ？兵士さん達？一応、此れでも戦は貴方方程じゃないけど経験はしてんでね。’」と同時に「‘女だからと思ってあまり甘く見ていると足元すくわれるよ？’」とニヤリ。

すると美零が「夏美様！！」

夏美は一瞬殺気を感じたのか思わず後ろに振り向き刀を防いだ。

其処には兵士達の声で「みっ、三成様！！！」

夏美心の中で・・

オイオイ・・この男が大将か？

三成？？ひょっとして・・・・石田三成か？？？この男が。

三成は夏美を見て「・・・私の刀を‘いとも簡単にふさぐとはな’。」と同時に「・・貴様何者だ？」

夏美フッと笑い「何(なぁ)に只の‘通りすがりの者ですよ。’」と翡翠刀を構えながら言った。

そして三成は夏美と少々距離を置きまた抜刀し夏美に襲いかかる。

夏美自身も翡翠刀で応戦するのも流石の早さに戸惑っていた。

すると美零が「夏美様ッ！！」

夏美は美零に「美零ッ！！此処は，任せろ，そして残りの兵たちの相手を相棒と共に頼む！！」そして

ライカを見て「，後は頼んだ！，相棒！！」

ライカも頷き「承知した。相棒。」と同時に「じゃ、メグナちゃん行くかい？？」

メグナも頷き「了解っと！！」とそう言いながらクナイを構えながら「まァ～気楽にの～んびりやりますか。本当なら基本的に無益な争いはしないたちなんだけど・・この場合はしょうがないね。」と同時に戦闘モードになり「ワカバ忍び軍長及び橘夏美専属忍び形川メグナいざ忍び参る！」

夏美は心の中であのやろう・・名乗ったら名前ばれるってねェのと心の中で苦笑いをしていた。

すると三成が「・・，橘夏美，其れが貴様の名か。」

夏美苦笑いをして「ばれちまったらしょうがないか。その通り。其れが私の名。で？改めて貴方の名を聞こう。」

三成が其れを聞いてニヤリと笑い「，もう知っているんじゃないか？異世界（未来から）来たのならな。，」

夏美はそれを聞いて驚いて両目を一瞬見開いていたが「いや・・参ったね。其処まで見抜かれているんじゃァ。お兄さん石田三成さんですね？」

三成再度ニヤリと笑い「いかにも。私が石田軍大将石田三成だ。」そう言いながら再度夏美に斬りかかった。

夏美は軽くかわして三成と距離を取ったと同時にドカァァんと音がした。

すると石田軍の爆弾兵がライカ達を追いかけていた。

夏美其れを見て「とりあえず安全な場所へ逃げろ！！！！！！相棒達！！そいつは爆弾兵だ！！」

するとメグナが手で印を結び「狭川忍法・・・。氷影分身！！！！

！氷龍爆撃波！！」

技を出し爆弾兵を次々と倒して行った。と同時に残りの兵士が一斉にライカ達に襲いかかる。

美零は夏美に「夏美様ッ！！爆弾兵も消えたので此処は何とかさせましょう。」

夏美其れを見て「メグナの奴やったか・・・よし！美零。‘アレ（撲殺），再度許可する。」とニヤリと笑い美零に言って、美零も其れを見てフッと笑い「承知！」そして体に炎をまとい横髪がはらりとはらりと舞っていった。

と同時に夏美も再度三成と対峙していた。

そして「・・・さってと。どうくぎりぬけるかしらねェ？」と呟いていた。

第1章。プロローグ。　（現代から戦国へ！？）完。

第1章。プロローグ。　（現代から戦国へ！？）（後書き）

有難うございます。有難うございます。有難うございます。

有難うございます。今章も御付き合い下さいまして今章も無事に更新完了致しました。

其れではほぼ毎回？のグタグタ予告風です。

広州の対立していたワカバ組が飛ばされたのは何と戦国時代だった。

と同時についてそうそうワカバ組は、トラブル、に見舞われてしまう。

そのトラブルは何と！？あの凶王である石田三成が率いる石田軍との戦！？

そして仕舞には夏美は急きょ石田三成と対峙することとなってしまう！？

其れを遠目で見ているのは奥州の伊達軍そして・・武田軍真田分隊。

そして・・夏美の中にある、ある秘密がついに！？、

メグナ「第2章。現代から来てそして戦国に降り立ったワカバ組ＶＳ石田軍！？」「次章も宜しくねェ～。あ・・そうそう多分次章か

ら前書きチィと
私しゃァ様達が出てくるかもしれないのね？その辺はご了承ね？」
以上です。其れでは次章も今章同様にお楽しみ頂ければ幸いです。
有難うございます。

第2章。現代から来てそして戦国に降り立ったワカバ組ＶＳ石田軍！？（前書き

有難うございます。今章も御付き合い下さいまして有難うございます。

ちょっと前かきを変えてみたいと思います。

ラ：オイオイ現代から着て相当トラブルかァ？笑；

夏：みてぇだなァ（タバコに火を灯す笑）

美：ですな・・・。

メ：この後私しゃァ様たちどうなるんだろうねェ？

其れは今章を読んでからのお楽しみ??です（笑）

ラ：何故に疑問形！？（笑；）

尚、今章も長丁場等残酷シーン等編集可能性ありですので予めご了承ください。

メ：いつもじゃん！（笑）

ってなわけで第2章始まり始まり～♪

第2章。現代から来てそして戦国に降り立ったワカバ組ＶＳ石田軍！？

広州の対立していたワカバ組が飛ばされたのは何と戦国時代だった。

と同時についてそうそうワカバ組は，トラブル，に見舞われてしまう。

そのトラブルは何と！？あの凶王である石田三成が率いる石田軍との戦！？

そして仕舞には夏美は急きょ石田三成と対峙することとなってしまう！？

其れを遠目で見ているのは奥州の伊達軍そして・・武田軍真田別働隊。

夏美達は伊達軍達に見られているとは知らずにまずはどう石田三成を打倒しようか考えていた。

さてと・・・どうするよ？相手は石田軍の大将。そう簡単に事すまされないか。

となれば、もし・・・・・，勝つ方法があるとしたら，適しているか分からねェが・・・

1つは昔の‘炎龍の力’を紅刀(くれとう)で取り戻すかそして紅の竜の刺青を斬り血を流し‘炎龍暴走化’するか。

もう1つは‘黒月’で‘あいつを呼び覚ますか’。

それともう1つはこのままの私しゃァで行くか・・・・・。

さぁてとどうするかね。

一方、ライカ達はと言うとあっという間に石田軍の兵達を倒して行った。

美零周りを見て「ふう・・何とか終わったな。」

ライカはタバコに火を灯して苦笑いをし「あのさ・・撲殺になった

んだから私しゃァ等の出番なくてもよかったんじゃァ。」

メグナも苦笑いして「そうだねェ。」

美零はフッと笑い「何を言うか・・お前達も働いてくれたからこうも簡単に終わったんだ。」

と同時に美零は1つの刀を取り出した。

‘黒月’だった。と同時に心の中で・・・・。

申し訳ございませぬ。夏美様。石田三成と言う男は危険な男だと見受けられますゆえ、夏美様ご自身の為にも‘彼女を’呼び覚ませて頂きます。

と呟きながらライカ達と共に三成と対峙していると思われる場所に向かった。

すると夏美は翡翠刀を鞘に収めて紅刀(くれとう)を取り出そうとした次の瞬間
「夏美様ッ！！その刀は危険です！此れをお使い下され！」と美零は黒月を夏美に投げ渡し夏美はそれを受け取り美零を見てフッと笑い「その様子だと、あっちは終わった見てェだな、？」

美零頷いていた。

三成はそれを見て軽く舌打ちし「・・女ごときに私の兵士がやられる等・・・。」

夏美はニヤリと笑い「うちの左腕舐めてんじゃないよ？女だからってねやる時はやるんだ。」と同時に

「只、女ごときって言葉は頂けねェな・・。本当なら、頼りたくねぇんだが、三成さん相手じゃ頼らざる追えないかもね、・・・。」そう言いながら黒い風が夏美の周りを回る様になった。

一方、其れを見ていた伊達軍と真田別働隊。

政宗はそれを見て「Ｈｍｕ・・？ｂｌａｃｋｗｉｎｄか？？」

幸村も「・・あの女子を包み込んでいるようでござる。」

狂も其れを見て「・・・‘まさか嘗ての俺と同じ様なパターンか？’」

そして、夏美は三成に「・・・‘今度お相手するのは私であって私ではない’‘もう一人の方’が相手するよ。」と続け様に「・・・‘頼んだぜ？相棒？’」

そして夏美に一気に黒い風が舞い包み込んで黒い風が止まりやんだ。

すると夏美の眼がさらに‘黒く帯びていた’。と同時に黒月を鞘から抜き取り肩に黒月をかけた。

三成其れを見て「・・・‘貴様さっきの小娘ではないな？何者だ？’」

夏美は苦笑いをして「・・私しゃァに名を聞くとはずいぶん物好きな人がいたもんだ。良いぜ？教えておいてやるよ。人は私を、‘黒煉’と呼ぶ。」

そして黒月を三成の前に突き出し「・・・‘言っとくがなァ。私しゃァは夏美（相棒）見てェによ。仲間を侮辱する奴には容赦はしね

ぇぜ?・?・,‘ 其れなりの覚悟はしとくんだなァ?・三成の兄さんよォ?・,」

すると一気に殺気みじていた。

メグナはそれを見て苦笑いをし「ハハハ。ありゃァ黒煉の姉さん切れてんね。完全に・・。」と呟いた。

第2章。現代から来てそして戦国に降り立ったワカバ組VS石田軍!?・完。

第2章。現代から来てそして戦国に降り立ったワカバ組ＶＳ石田軍！？（後書き

有難うございます。有難うございます。今章も無事に更新完了致しました。

有難うございます。

其れではほぼ毎回ですがグタグタ予告をどうぞ笑

其れを見ていた政宗は「～♪すげぇ‘殺気だぜ’。あれが‘あのｇｉｒｌ’の‘実力か？’」

すると狂が「いや・・伊達の大将。ありゃァ‘さっきの嬢ちゃんじゃねェ’

‘多分入れ替わっているんだ。’‘俺が昔壬生京四郎の体に入れられた時と同様にな・・・。’」

其れを聞いた小十郎は眼を見開き「んな？‘そう言う事ってあり得るのか？狂？’」

狂頷き「あァ、信じられネェ話だが・・・場合によっちゃぁあり得るぜ。

片倉の副大将。」

と同時に幸村が「政宗殿。狂殿。片倉殿。始まったみたいでござるぞ？」

その声で再度夏美達（黒煉）の方に眼をやった。

すると三成と黒煉が刀を交えていた。

黒煉はそれを見て「・・‘速いな。’」と同時に「だが、私しゃァも‘闇の始末屋界の女王’と呼ばれた女さ。」そして一瞬隙を見て三成から離れ黒月を構え直し「・・・‘悪いがさっさと終わらせてもらうよ。’」と同時に両目をつむり気を高め両目を開き「黒月流神派・・・。黒風！！！！」と技を放った。

と同時に風の音がして三成は刀を再度握り締めて「・・なんだ？今の技は？

‘全然通用していないぞ？’‘こんなんで私を倒せるとでも思うのか？’」

と同時に夏美に斬りかかろうとした次の瞬間三成の体から血飛沫が舞って

三成は驚きながら崩れるように倒れ込んだ。

黒煉はタバコに火を灯しフッと笑い「悪いねェ。私しゃァの‘技の威力は後から来るんだ。’」と続けながら「兄さんにも‘聞こえただろう？黒い風の音が’。」

ライカはそれを見て苦笑いし「・・流石は黒煉の姉さんだ。」

一方、政宗達はそれを見て血がうずいていた。

小十郎はそれを見て頭を抱えて。。またか??と心の中で呟き、狂はそれを見てニヤリと笑っていた。

まるで面白いもん見つけたと思わんばかりに・・・。

黒煉「第3章。夏美の中に眠っていた，闇の始末屋の女王と呼ばれた黒煉，覚醒し、石田三成と対戦その後・・・・・。」

「次章もどうぞ宜しくね？」

有難うございます。其れでは、次章も今章同等にお楽しみ頂ければありがたいです。

以上です。

第3章。夏美の中に眠っていた，闇の始末屋の女王と呼ばれた黒煉，覚醒し、石

有難うございます。今章も御付き合い下さいまして有難うございます。

メ：有難うね～。さてと・・今章はね。ななな～んと！黒煉の姉さんが・・あの凶王を倒しィ・・・。

ラ：んでもって、其れを見ていたある軍勢の大将が姉さんに眼をつけて挑んで・・

来る予定なんだな。

予定なんだって笑；；

美：今章もおそらく長丁場の残酷シーン等あり予定なので予めご了承いただきたく存じます。

夏（黒煉）：ま、いつもの事さね。キャラ上しゃべり方は乱雑なのは御了承してな？

さてと・・では第3章。お楽しみください。（一礼）

第3章。夏美の中に眠っていた、闇の始末屋の女王と呼ばれた黒煉、覚醒し、互

其れを見ていた政宗は「～♪すげぇ、殺気だぜ、。あれが、あのｇｉｒｌ、の、実力か？、」

すると狂が「いや・・伊達の大将。ありゃァ、さっきの嬢ちゃんじゃねェ、

、多分入れ替わっているんだ。、、俺が昔壬生京四郎の体に入れられた時と同様にな・・。、」

其れを聞いた小十郎は眼を見開き「んな？、そう言う事ってあり得るのか？狂？、」

狂頷き「あァ、信じられネェ話だが・・・場合によっちゃぁあり得るぜ。

片倉の副大将。」

と同時に幸村が「政宗殿。狂殿。片倉殿。始まったみたいでござるぞ？」

その声で再度夏美達（黒煉）の方に眼をやった。

すると三成と黒煉が刀を交えていた。

黒煉はそれを見て「・・、速いな。、」と同時に「だが、私しゃァも、闇の始末屋界の女王、と呼ばれた女さ。」そして一瞬隙を見て三成から離れ黒月を構え直し「・・・、悪いがさっさと終わらせて

もらうよ。’」と同時に両目をつむり気を高め両目を開き「黒月流神派・・・。黒風！！！！」と技を放った。

と同時に風の音がして三成は刀を再度握り締めて「・・なんだ？今の技は？

‘全然通用していないぞ？’‘こんなんで私を倒せるとでも思うのか？’」

と同時に夏美に斬りかかろうとした次の瞬間三成の体から血飛沫が舞って

三成は驚きながら崩れるように倒れ込んだ。

黒煉はタバコに火を灯しフッと笑い「悪いねェ。私しゃァの‘技の威力は後から来るんだ。’」と続けながら「兄さんにも‘聞こえただろう？黒い風の音が’。」

ライカはそれを見て苦笑いし「・・流石は黒煉の姉さんだ。」

一方、政宗達はそれを見て血がうずいていた。

小十郎はそれを見て頭を抱えて。。またか??と心の中で呟き、狂はそれを見てニヤリと笑っていた。

まるで面白いもん見つけたと思わんばかりに・・・。

すると黒煉は何かを感じたのか政宗達の所を見てフッと苦笑いし「・・どうやら、‘私らを見ていたお方達がいたようだね。’」すると

ドドドドドと馬の音がした。

ライカ驚き「馬？」

すると「Ａｒｅ　ｙｏｕ　ｒｅａｄｙ　ｇｕｙｓ！？」

「ｙｅａｈーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー！」

其れを見て確認をしに行ったメグナが急に慌てて戻って来て「ライカの姉さん方引いた方がいい青の旗の軍勢と赤の旗の軍勢がこっち来る！！」

其れを聞いたライカを始め美零は驚いて顔見合せた。

黒煉はタバコを吸いつつ「・・・、大方此処の時代の方々だろう。私しゃァ達の戦い気になっていたから見ていたんだろうね。，でもなァ・・基本的に、面倒事は嫌いだし何より此れ以上私しゃァが相棒（夏美）の体を占拠状態ってのもね。，」と続け様に「まァ、どっか逃げるか。」そう言いながら後ろを

向いた次の瞬間笑いながら「オイオイ。そりゃぁねぇだろうよ。嬢ちゃん。」と背後から何者かが斬りかかった。だが、黒煉がすぐに察知して背後を黒月で護りとおして苦笑いをし「‘ずいぶんな御挨拶だな。いきなり切りかかる人がいるかい？’」

すると「‘此処にいるぜ？’」と言った。

其処は伊達軍の紅の鬼と呼ばれた鬼眼の狂がいた。

黒煉狂を見て「・・‘何か用かい？黒髪の兄さん’」

狂は黒煉からちょっと離れ村正を肩に乗せてニヤリと笑い「‘アンタ強ええぇみたいだな？’チィと唐突で悪りィが俺とやりあってくれねぇか？？」

黒煉は軽くため息をつきタバコを携帯灰皿を出しもみ消しながら苦笑いし「‘物好きがいたもんだ。’ひょっとしてさっきの見ていたね。言っとくけどさ・・あれは只のまぐれ。私はそんなに強くねェぜ？」

その光景を見ていたメグナ達はと言うと・・・・・・・・・・・。

嘘つけェ！！黒煉の姉さん。向こう（現代）では無敵を誇っていたじゃねェか！！！と内心度付いていた。

一方の美零は頭を抱えて心の中で・・・・。

黒煉の姉さん出したの間違えたか？と苦笑いして呟いていた。

でも、黒煉は軽くため息をつき「基本的に、無益な争いはしないたちなんだがな・・私も相棒も，」と黒月を狂の前に突き刺し「だが、‘売られた勝負は話は別だ。’‘せっかくの御誘いは断れないからねェ’

まァ、‘相棒には悪いが・・・もう少しこの体借りるとするかねェ。’」

其れを聞いた狂は満足そうに笑い「・・と言う訳だ。此処は俺にひとまず任せてくれねぇか？伊達の大将、片倉の副大将。」と後ろを振り向いた。

すると後ろには青と赤の旗の軍勢がいた。

と同時に「Ｏｋａｙ！！好きにしな。狂。」と同時に腹心と思われる男に「良いだろう？小十郎？」

小十郎はフッと笑い「貴方様がお気目になられた事です。この小十郎異存はありません。」と同時に「寧ろ、この小十郎も見てみたいのですよ。うちの紅の鬼と戦っているあの少女の姿をね。」

そして男をこう呼んだ「政宗様。」

メグナは一瞬驚いてん???

小十郎????そして政宗?????まさか・・・・・・?????あの2人奥州の?????独眼竜伊達政宗とその右目の片倉小十郎?????と言う事は此処って本当に本当にうちらの世界じゃなくて、別の世界?????ってぇ事?????となると・・あの広州の連中の手によって?????こっちに????

と呟いていた。

そして美零に小声で「・・・美零の姉さん。」

美零は小声で「どうした?メグナ?」

メグナは自分が思った通りの事を美零に説明した。

美零は軽く頷き「・・そうか。」と呟いていた。

そして政宗は狂に「但し、‘熱くなりすぎるな??’‘Ｃｏｏｌ’に行けよ?」

其れを聞いた狂もニヤリと笑い「あァ。努力するぜ?伊達の大将。」

すると黒煉もライカに「・・ライカちゃん。すまねぇな。‘もうしばらく相棒の体借りて行くかも知れねェ’。」

ライカタバコに再度火を灯し苦笑いし「・・‘別にかまいませんけど、ちゃんとあいつに許可取っておいてくださいね。’後で戻った時にもし万が一の事があったら多分またどやされると思いますんで。」

黒煉もフッと笑い「承知した。」と同時に「‘聞こえるか?夏美??’」

すると・・。

『‘・・・聞こえているさ。黒煉’。』

すると狂やライカ達は驚かずにそして政宗達は驚いていた。

ライカタバコ吸いながら「・・‘起きていたのか？相棒？’」

夏美『・・あァ。‘起きていたよ。寧ろ、いつもの場所違いだからさ。不安だしよ迂闊に寝てられネェんダわ。’』と苦笑いして言った。

そして黒煉はすまなそうに「此れライカちゃんにも伝えたんだけどさ、悪いが・・・後しばらく‘貸しておいてくれねぇか？？？’どうも‘仕合挑まれちまってさ。’」

夏美軽くため息をつき『・・止めようとしてもお前さんのこったやるんだろうよ。良いよ。止めはしないよ。お前さんの思った通りにやりなよ。さっきも言ったが私しゃァは止めんさ。』と続け様に『・・只さ。』

黒煉は不思議そうに「・・只なんだ？？」

夏美『・・妙な勘繰りでな、あの兄さん多分さっき戦った三成さんより強いかも知れねェ。』と続け様に『後は、頼むからあれはあまりつかわネェでくれよ？（あれは黒鳳凰）』

黒煉はそれを聞いてハハハと笑い「まァ、あの兄さん出次第だな。だが、前慮はするさ。」

夏美しぶそうな顔して『・・アレ使われると仕事の時にさ筋肉痛で前動けなかった時があったからさ。』

黒煉其れを聞いて「え？マジでカ？了解した。出来るならな。まァ‘此処では当分ワカバ（いつもの）仕事はねぇだろうがな。」

夏美はそれを聞いてタメ息をつき『・・さてと、そろそろ始めたら先方さん待ちくたびれている見てェだ。』

黒煉は狂を見てフッと笑い「そうみてぇだな。悪かったな。夏美。」

其れを聞いて夏美は『・・いいえ～。まァ頑張ってね。私しゃァは‘中でひとまず見させてもらおうかね。’』そして会話は終わり黒煉は狂を再度見て「お待たせして悪かった。改めて、黒煉事本名周崎渚だ。」

狂は黒煉を見て「奥州伊達軍の紅の鬼で一応Ｎｏ、３の鬼眼の狂だ。改めて宜しくな？」

そう言いながら「さぁて！やりあおうぜ？？楽しませてくれよ？」

黒煉も再度フッと笑いながら「良いよ？やりあおうか？」と同時に「闇の始末屋の女王と呼ばれた私の力お見せするよ。」と同時に「微力ながらこの黒煉。相手させてもらう」そう言いながら黒月を構え直し

狂に向かって突進していった。

狂はそのスピードを見て驚いたが、寧ろそれが興奮を誘った。

第３章。夏美の中に眠っていた‘闇の始末屋の女王と呼ばれた黒煉’覚醒し、石田三成と対戦その後・・・・・。完。

第3章。夏美の中に眠っていた，闇の始末屋の女王と呼ばれた黒煉，覚醒し、石

有難うございます。今章も無事に更新完了致しました。

今章も御付き合い頂きありがとうございます。

其れではほぼ毎回のグタグタ予告をどうぞ。

戦国時代に広州の一員の手によって飛ばされた夏美（現黒煉）達は石田三成と対戦後、奥州の独眼竜に仕える鬼眼の狂に出会いそして黒煉は狂に仕合を挑まれた。

そして黒煉の黒月が狂に向かって冴えわたった。

狂は村正を使い対応した。

そして心の中で、こいつやっぱりおもしれェ女だ。スピードと言い力量と言い申し分ねェ。借りの体だって言うのに此処まで来るとはおもしれェぜ！！

久々に‘良い仕合’が出来そうだぜ！！！

一方、黒煉も心の中で、凄いな。久々だ。こんなにも‘血が滾るなんてな！’この兄さん凄いな。久々に楽しめそうだ。

其れを見ていたライカは苦笑いをし「あァ～‘あの眼’黒煉の姉さんが‘とても楽しんじゃっている眼だ。’こりゃァ当分‘終わりそうにねぇな’。」

と言い其れを聞いた美零もため息交じりで苦笑いをして「・・そうだな。」
メグナも軽くため息をつき頭を抱えて「本当だわァ～。ありゃァ当分終わりそうにないわねェ。」と言ったと同時に「え？そうなの？？」と男の声がしてメグナも頷きながら「そうそう。当分こりゃァ終わりそうにもないわぁ。」と同時にん？？となりとなりを見て其処には迷彩服の男がいて「やぁ～！」とにこやかにメグナに挨拶した。

メグナは驚いきながら「何時からいた？？」

迷彩服の男は「ん～？「本当だわァ～ありゃァ当分終わりそうにもないわぁ～」って所からかな。」

メグナ頭抱えて「あ、そう。」と同時に迷彩服の男は「俺様武田軍の真田忍隊隊長猿飛佐助。アンタは？」

メグナは「一応、ワカバ忍び組長で、狂さんって人と戦っている女の人いるでしょ？今は‘入れ替わっちゃって黒煉の姉さんになってるけど・・’‘あの人の本当の体の持ち主である橘夏美ッて人の所属忍びの形川メグナ。」

佐助はそれを聞いて「あれ？お宅も忍びなの？？まァ女だからクノ一か。」

メグナ苦笑いし「まァ、そうなの。クノ一らしくないクノ一ってよく言われるけどさ。まァ、性格上し方ないのよねぇ。私しゃァ様お気楽過ぎるから」

佐助はそれを聞いて「まるでかすがみたいだね。お宅・・。」

メグナ其れを聞いて「かすが？猿飛さんの知り合いかい？」

佐助頷き「まぁねぇ～。一応忍びの里一緒だし」と続け様に「まァ同じ忍び同士気楽に仲良く行きましょうや。だから好きなように呼んでよ。」

メグナ「・・じゃぁ、御言葉に甘えさせて猿飛の旦那さんでいい？」

佐助驚いたがすぐに冷静になり「俺様を旦那呼ばわりしてくれるのおたくぐらいだよ。別にかまわないけどさ。」

メグナはそれを聞いて「良かった。なら猿飛の旦那さんも好きに呼んでよ。」

佐助はそれを聞いて「じゃ、メグナって呼んでも良いかい？」

メグナ頷き「良いよ～。」と同時に黒い風が潔く舞い始め佐助達はその方向を見た。

すると黒煉が再度刀を上に構え直して「では、‘女でも本気を出して戦ってくれた兄さんに敬意を表し特別にこの技で迎えてあげるよ。’」

と同時に空を見て黒い風が黒く舞いそして鳳凰の形を作り出そうと

した。

メグナ其れを見てぎょっとなって「ちょ！自粛して～！黒煉の姉さァァァん！！そいつはまずいって！！夏美の姉さんにも言われたでしょうがァァァァ！！！」と慌てて言った。

と同時に美零が側に来て「・・・諦めろ。メグナ。、あの男を相手にしている以上止められん。」と苦笑いして言った。

メグナはそれを見てガクッと両肩を落した。

と同時に佐助がメグナの肩を軽くたたき「おたくも大変ねェ～。」

メグナ「・・・猿飛の旦那。大体いつもの事だからさもう慣れたよ。」

と苦笑いをして言った。

と同時に美零と佐助は互いに自己紹介をした。

美零「第４章。奥州の独眼竜に仕える鬼眼の狂が伊達軍とそして武田軍と共に現れそして黒煉と仕合う。」

「次章もどうぞ宜しくお願い致す。」

其れでは次章も今章同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

有難うございます。以上です。

第４章。奥州の独眼竜に仕える鬼眼の狂が伊達軍とそして武田軍と共に現れそ

有難うございます。今章も御付き合い頂いて有難うございます。

さて、今章はですね・・・。

メ：鬼眼の狂の旦那さんが奥州伊達軍達と登場して～黒煉の姉さんとやりあっちゃうよ～笑

ラ：んでもって、武田のオカン？・・・失礼した優秀な？忍び君がご登場だよ。

美：でもって今章も前章同様に長丁場編集可能性残酷シーン等あり予定なので予めご了承頂きたい。

其れでは第４章の幕開けでございます（一礼）

第４章。奥州の独眼竜に仕える鬼眼の狂が伊達軍とそして武田軍と共に現れそ

戦国時代に広州の一員の手によって飛ばされた夏美（現黒煉）達は石田三成と対戦後、奥州の独眼竜に仕える鬼眼の狂に出会いそして黒煉は狂に仕合を挑まれた。

そして黒煉の黒月が狂に向かって冴えわたった。

狂は村正を使い対応した。

そして心の中で、こいつやっぱりおもしれェ女だ。スピードと言い力量と言い申し分ねェ。借りの体だって言うのに此処まで来るとはおもしれェぜ！！

久々に‘良い仕合’が出来そうだぜ！！！

一方、黒煉も心の中で、凄いな。久々だ。こんなにも‘血が滾るなんてな！’この兄さん凄いな。久々に楽しめそうだ。

其れを見ていたライカは苦笑いをし「あァ～‘あの眼’黒煉の姉さんが‘とても楽しんじゃっている眼だ。’こりゃァ当分‘終わりそうにねぇな’。」

と言い其れを聞いた美零もため息交じりで苦笑いをして「・・そうだな。」

メグナも軽くため息をつき頭を抱えて「本当だわァ～。ありゃァ当分終わりそうにないわねェ。」と言ったと同時に「え？そうなの？？」と男の声がしてメグナも頷きながら「そうそう。当分こりゃァ終わりそうにもないわぁ。」と同時にん？？となりとなりを見て其処には迷彩服の男がいて「やぁ～！」とにこやかにメグナに挨拶し

た。

メグナは驚いきながら「何時からいた??」

迷彩服の男は「ん〜?「本当だわァ〜ありゃァ当分終わりそうにもないわぁ〜」って所からかな。」

メグナ頭抱えて「あ、そう。」と同時に迷彩服の男は「俺様武田軍の真田忍隊隊長猿飛佐助。アンタは?」

メグナは「一応、ワカバ忍び組長で、狂さんって人と戦っている女の人いるでしょ?今は、入れ替わっちゃって黒煉の姉さんになってるけど・・,‘あの人の本当の体の持ち主である橘夏美ッて人の所属忍びの形川メグナ。」

佐助はそれを聞いて「あれ?お宅も忍びなの??まァ女だからクノ一か。」

メグナ苦笑いし「まァ、そうなの。クノ一らしくないクノ一ってよく言われるけどさ。まァ、性格上し方ないのよねぇ。私しゃァ様お気楽過ぎるから」

佐助はそれを聞いて「まるでかすがみたいだね。お宅・・。」

メグナ其れを聞いて「かすが?猿飛さんの知り合いかい?」

佐助頷き「まぁねぇ〜。一応忍びの里一緒だし」と続け様に「まァ同じ忍び同士気楽に仲良く行きましょうや。だから好きなように呼

んでよ。」

メグナ「・・じゃぁ、御言葉に甘えさせて猿飛の旦那さんでいい？」

佐助驚いたがすぐに冷静になり「俺様を旦那呼ばわりしてくれるのおたくぐらいだよ。別にかまわないけどさ。」

メグナはそれを聞いて「良かった。なら猿飛の旦那さんも好きに呼んでよ。」

佐助はそれを聞いて「じゃ、メグナって呼んでも良いかい？」

メグナ頷き「良いよ～。」と同時に黒い風が潔く舞い始め佐助達はその方向を見た。

すると黒煉が再度刀を上に構え直して「では、‘女でも本気を出して戦ってくれた兄さんに敬意を表し特別にこの技で迎えてあげるよ。’」

と同時に空を見て黒い風が黒く舞いそして鳳凰の形を作り出そうとした。

メグナ其れを見てぎょっとなって「ちょ！自粛して～！黒煉の姉さァァァん！！そいつはまずいって！！夏美の姉さんにも言われたでしょうがァァァァ！！！」と慌てて言った。

と同時に美零が側に来て「・・諦めろ。メグナ。‘あの男（ヒト）を相手に

している以上止められん。」と苦笑いして言った。

メグナはそれを見てガクッと両肩を落した。

と同時に佐助がメグナの肩を軽くたたき「おたくも大変ねェ～。」

メグナ「・・・猿飛の旦那。大体いつもの事だからさもう慣れたよ。」

と苦笑いをして言った。

と同時に美零と佐助は互いに自己紹介をした。

そして狂達の所を見た。

黒煉は「黒月流神派！！！奥義！黒鳳凰！！」と技を放った。

其れは黒月に黒の風を舞いながらそして鳳凰の形をしていた。

そして心の中で・・・・。

‘頼む！今回ばかりは耐えてくれよ？夏美（相棒）の体よ！’と呟いていた。

そして狂も刀を構えながら「無明神風流！殺人剣！！奥義！朱雀！！」そして黒煉に向かって技を放った。

お互いにお互いの奥義が炸裂した。

そして・・・・・風がお互いの間を吹いた。

すると狂が村正を鞘に収め黒煉も黒月を鞘に収めた。

と同時に黒煉が軽く舌打ちし「・・・‘どうやらまともに喰らっちまったみたいだね’。」と呟きそして

黒煉（夏美）の体から血飛沫が舞い黒煉はその場で膝を崩れるように倒れた。

狂は黒煉を見て「・・・お前も‘感じただろう’？‘朱雀の息吹き’を。」と同時に狂の体からも血飛沫がいつの間にか出てきた。と同時にその場に足を崩れるように倒れた。

狂ククと笑いながら「・・・‘どうやら俺もまともに喰らっちまった見てぇだな’。」

黒煉もフッと笑い「・・・‘どうやら、兄さんにも聞こえたようだね。黒鳳凰の鳴き声’が・・・ね。」そう言いパタと倒れ込んだ。

そしてメグナは慌てて「黒煉の姉さん！！！大丈夫かい！？しっかり！？」と声をかけると同時にフッと眼が覚めると同時に其処には‘普通の漆黒の色の眼’に戻ってた。

其れを見てメグナは「・・・あれ？夏美の姉さん？」

するとあくびをしながら懐からタバコを取り出し火を灯し「あァ～‘ある意味災難だったな’。」その言葉を発した。

メグナ其れを聞いてずっこけた。

と同時にライカは苦笑いして「・・・‘戻ったそうそうの一言が其れかい？’相棒？」

美零も苦笑いをしつつメグナに「オイ・・メグナ。大丈夫か？」

メグナ体を起こしながら苦笑いをして「いててて・・。あり？一応念の為確認するけどさ・・‘戻って来たんだよね？夏美の姉さん？’」

夏美タバコを吸いながら「ん？あァ・・‘戻って来た。たでぇま～！’」

と同時に美零も「‘お帰りなさいませ。’夏美様。お体は？？」

夏美フッと笑い「‘今の所問題ねェ見たいだな。’‘黒煉（あいつ）が多分‘

痛みも序に持って行ってくれたんだろう。，」とそして首をならし「あァ～良く寝た。」

メグナ驚き突っ込んで「ちょ！見ているんじゃなかったの！？」

夏美苦笑いし「・・‘其れがさ。途中までは見ていたんだけどさ・・最後はお互いに激しくしていたからさ。眼がちかちかしてよ，。」と言った。

ライカ再度苦笑いし「・・お前さんらしいな。」

夏美も苦笑いし「・・だろ？」そして辺りを見渡して「・・さてと、此処から先どうするかね。」

と悩んでいた。

すると狂が「‘行き先ねぇんだろ？’‘なんだったら俺が大将たちに掛け合ってやろうか？’」と言った。

夏美達はでも・・・と言う顔していたが、「その必要はねェぜ。狂。」

すると小十郎が其処にいた。

狂小十郎を見て「・・片倉の副大将。」

小十郎フッと笑い「政宗様がな先程の仕合みてな。気に入られたみたいなのでな客人として迎えてぇとの事だ。」と続け様に「だが、もっとも行き場所が最初からなくて困っている奴をほっておくほど甲斐性なしじゃねェからな」

すると夏美は急いでタバコを消し小十郎に土下座して頭を下げ「・・この度は本当にありがとうございます。先程の仕合は，私では，ありませんが、この度の心遣い本当に感謝いたします。一応この中では私がリーダー格なので代表としてお礼させて頂きます。」と言った。

するとライカ以外は驚いた。

美零とメグナは顔見合せていた。

‘過去に色々とありそしてそれ故に初対面の人間には基本的に警戒する様にまた人間（ワカバ以外の人）を信じられなくなった夏美’それなのにあっさりとこうも・・・。

ライカはフッと笑い「‘恐らくあいつは久々に温かみのある人と出会えたんだろうな。’」と言った。

そして・・。

小十郎はフッと笑い夏美の前にしゃがみ「頭上げてくれ。俺は大した事してねェよ。礼なら俺達の主に

言ってくれ。」

その事を聞いた夏美は頭をあげた。

小十郎は再度フッと笑い「改めて初めましてだな。俺は片倉小十郎。

奥州伊達軍にお仕えしている竜の右目だ。お前の名は？」

夏美は小十郎を見て「・・橘夏美と申します。そしてその後ろにいるのが、私の相棒（仲間）達です。」

ライカも前に出てきて「夏美の相棒のライカ・ネアンです。宜しくお願い致します。」

美零も一礼して「狭川美零と申すもので夏美様にお仕えしている者。」

メグナも一礼し「あまり見えないけど・・・一応夏美の姉さんに仕えさえてもらっているクノ一の形川メグナ。宜しく。」

小十郎も見てフッと笑い「おう！改めて宜しくな！」

すると無線機が鳴った。

小十郎はそれを見て「此れはなんだ？」

ライカは顔しぶめにして「・・信じてもらえないだろうですが、あえて言いますね。私達は此処の世界の人間ではありません。異世界から来たのです。此れは私達の時代で使われている無線機と言うもので。。

連絡等を取る為に使うのです。」

小十郎は「伝令みたいなものか？」

ライカ頷き「・・に近い様なものですね。」

すると無線機から・・。

男の声で『おーーーーーーーーーい！！ワカバ誰か其処（戦国）に堕ちていない！？もしいたら誰でも良い誰でも良い出てくれェ！！！』

その声を聞いた夏美は「あれ？ひょっとしてライフェイか？？それとも雷外？？」

『あーーーーーー！その声は夏美の姉御ッ！！』

夏美其れを聞いてフッと笑い「私の事‘姉御’って呼ぶのは雷外だな。」

雷外『・・良かった！やっと通じた！！兄さん！！！通じた！夏美の姉御が出てくれた！！』

と同時に奥の方から何だと！？そうか！と言い代わってくれと言う事で『夏美！聞こえるか！？』

夏美タバコを再度火に灯し「あァ・・。聞こえているよ。ライフェイか？」

ライフェイ頷き『あァ俺だ。ライフェイだ。良かった。通じて・・・なァ。単刀直入に聞くが、お前一人か？それとも・・・。』

夏美タバコ吸いながら「いいや・・1人じゃねェ。ライカそして美零、メグナ。だ。」

ライフェイ其れを聞いて頭を抱え『・・オイオイ。リーダー組両方かよ』と呟いていた。

第4章。奥州の独眼竜に仕える鬼眼の狂が伊達軍とそして武田軍と共に現れそして黒煉と仕合う。完。

第４章。奥州の独眼竜に仕える鬼眼の狂が伊達軍とそして武田軍と共に現れそ

やっと更新完了致しました。

有難うございます。有難うございます。有難うございます。

其れではほぼ毎回ですがグタグタ予告風をどうぞ笑

アレから黒煉一行？は狂との手合わせを終えそして黒煉は再度体を夏美に戻し伊達軍の竜の右目と呼ばれた片倉小十郎と出会い伊達軍に御世話になる事になった。

其れと同時にたまたま持って来ていた無線機からワカバの仲間である李ライフェイそして弟雷外から連絡が入って来た。

事情説明すると・・・。

ライフェイ『・・そうか。広州の戦の時に相手が作った大穴に夏美が巻き込まれそして美零達は夏美を助けようとしてその大穴に入り込んでしまって気がつけば、戦国の時代に来ていたと。そう言うことか。』

夏美頷き「あァ、‘信じられネェ話だろうが・・・事実だ’相棒。」

ライフェイ頭抱えて『・・しかし弱ったぞ？幹部でリーダー組２人いないと緊急事態の時に・・・。』

夏美は「ライフェイ・・」

ライフェイ頷き『・・あァ了解した。一応調べてみてまた折り返し連絡するぜ。』

夏美再度頷き「頼む。」

ライフェイ頷き『・・了解。そして、伊達軍の皆さん。音声だけで失礼します。俺は夏美達の仲間の李ライフェイと言います。突然で驚いた事でしょうが、こいつらは良い奴なのでどうぞ嫌いにならないでやって下さい。そして・・こいつらを宜しくお願い致します。』

小十郎頷き「あァ。分かった。任せてくれ。其れと紹介遅れたな。俺は片倉小十郎だ。宜しくな。」

そして狂も「鬼眼の狂だ。宜しくな。」

ライフェイも『片倉さん。狂さん。よろしくお願い致します。』と同時に『・・申し訳ないですが此れ以上は無理そうなのでひとまず。』

小十郎たち頷いた。

そして夏美も「連絡有難うな?」

ライフェイ『・・あァ。じゃお前等も気をつけて。』

するとメグナも「ライフェイの兄さんもね～。」

ライフェイ頷き『おう！お前もな天然ボケ』と笑いながら通信途絶えた。

メグナは「ちょ！最後其れはないよ！！ライフェイの兄さん！！！」と通信途絶えた無線機に突っ込んでいた。

小十郎を初め狂達は思わずその光景を笑っていた。

メグナ「第5章。奥州の伊達軍右目片倉小十郎現る。そして・・」

「次章もどうぞ宜しくね～。」

以上です。有難うございます。

第5章。奥州の伊達軍右目片倉小十郎現る。そして・・・（前書き）

有難うございます。

さて今章はですね。片倉さんが出てくる予定です。

長丁場の編集可能性等もございます。

ラ：相変わらずだねェ～。

・・・其れではお楽しみください。

メ：あ、はぐらかした・・笑　それじゃ第5章の始まり始まり～。

第5章。奥州の伊達軍右目片倉小十郎現る。そして・・

アレから黒煉一行？は狂との手合わせを終えそして黒煉は再度体を夏美に戻し伊達軍の竜の右目と呼ばれた片倉小十郎と出会い伊達軍に御世話になる事になった。

其れと同時にたまたま持って来ていた無線機からワカバの仲間である李ライフェイそして弟雷外から連絡が入って来た。

事情説明すると・・。

ライフェイ『・・そうか。広州の戦の時に相手が作った大穴に夏美が巻き込まれそして美零達は夏美を助けようとしてその大穴に入り込んでしまって気がつけば、戦国の時代に来ていたと。そう言うことか。』

夏美頷き「あァ、‘信じられネェ話だろうが・・・事実だ’相棒。」

ライフェイ頭抱えて『・・しかし弱ったぞ？幹部でリーダー組２人いないと緊急事態の時に・・・。』

夏美は「ライフェイ・・」

ライフェイ頷き『・・あァ了解した。一応調べてみてまた折り返し連絡するぜ。』

夏美再度頷き「頼む。」

ライフェイ頷き『・・了解。そして、伊達軍の皆さん。音声だけで失礼します。俺は夏美達の仲間の李ライフェイと言います。突然で驚いた事でしょうが、こいつらは良い奴なのでどうぞ嫌いにならないでやって下さい。そして・・こいつらを宜しくお願い致します。』

小十郎頷き「あァ。分かった。任せてくれ。其れと紹介遅れたな。俺は片倉小十郎だ。宜しくな。」

そして狂も「鬼眼の狂だ。宜しくな。」

ライフェイも『片倉さん。狂さん。よろしくお願い致します。』と同時に『・・申し訳ないですが此れ以上は無理そうなのでひとまず。』

小十郎たち頷いた。

そして夏美も「連絡有難うな?」

ライフェイ『・・あァ。じゃお前等も気をつけて。』

するとメグナも「ライフェイの兄さんもね〜。」

ライフェイ頷き『おう!お前もな天然ボケ』と笑いながら通信途絶

えた。

メグナは「ちょ！最後其れはないよ！！ライフェイの兄さん！！！」と通信途絶えた無線機に突っ込んでいた。

小十郎を初め狂達は思わずその光景を笑っていた。

そして、夏美はメグナに向かって「・・メグナ。多少此処把握しとかないとな？一応見回り頼んだぜ？

ひょっとしたら、広州（奴ら），も来る可能性が否定できないかも知れねェからな。」

メグナ頷き「了解っと！」と同時に佐助に「・・猿飛の旦那さん。」

佐助フッと笑い「良いよ～。俺様も一緒に付き合うよ。だってメグナは此処全然分からんでしょ？」

メグナがくりとしながらも「うん。そう。だから頼めるかい？」

佐助頷き「はいよ～。じゃ！橘のお嬢ちゃん。おたくのクノ一ちょ

っと預かるねェ？」

夏美頷き「ハイ。宜しくお願い致します。猿飛さん。」と一礼しメグナに「しっかりやって来いよォ～。」と手を振った。

と同時に「すまねぇなァ～‘当分お前さんの給料払えそうにねぇ！’」

メグナはそれを聞いて「えぇぇぇ～～～～～～～。」と嘆いていた。

夏美はそれを聞いてタバコに火を灯し苦笑いしながら「・・‘だってしゃぁねえだろうが・・’私しゃァ達がいるのは‘自分達の世界じゃなくて異世界何だからよ。’」と呟いた。

そして・・・。

夏美は空を見て「・・ごめん父さん達、‘父さん達との誓い（宿命約束）’今から当分果たせそうにねぇわ。」

そしてライカ達も其れを見て顔を思わず見合わせた。

すると夏美の後ろに人影が。

ライカ其れを見て「・・・相棒！！」

夏美はそれを聞きながら翡翠刀で攻撃を抑え「・・・・ちょいとちょいと。またトラブルかい。」と苦笑いしていた。

小十郎はその男の姿を見て「・・んな！！て、てめェは・・・・・。伝説の忍び！！！」

夏美はそれを聞いて両目を見開き軽く舌打ちし「・・‘風魔小太郎’か。」と小声で呟いた。

風魔はそれを聞いて「・・・！！！」そしてまた再度クナイを取り出し夏美に向かって突進して行った。

夏美は軽く舌打ちし「・・‘すまねぇがまたバトンタッチだ！相棒（黒煉）！’」そう言い黒い風が舞い

夏美を包みそして黒月を再度鞘から抜き取り苦笑いし「・・‘ヘイヘイ。承知したよ。’夏美。」そう言い「悪いねェ。伝説の忍びの兄さん。此処から先はこの私しゃァ‘黒煉’が相手するよ。」と風魔を見て

言った。

しかし、風魔はそれを見て警戒を解いていつの間にか消えていた。

黒煉は驚いて「・・チッ！何がしたかったんだ！？あの忍びの兄さんは。」と呟きながら再度懐からタバコを取り出し火を灯した。

と同時に離れた場所のある崖から「ほぅ。此れは此れは、面白いものをみたな’。」と男が呟いた。

ー異世界のお嬢さん方卿達はこの世界でどう、暴れてくれるのかね？’ー

すると黒煉が何かの気配を感じたのかその崖方面を見た。

すると1人の男がいた。

男はそれを見て「・・ほぅ。‘私がいるのを感じたのか。’」

あのお嬢さんは中々出来るな。

一方、黒煉は険しい顔をして・・・。

あの男は一体何もんだ？と心の中で呟き。小十郎達と共にひとまずは小十郎達の主である奥州筆頭伊達政宗の所へと向かうのであった。

第5章。奥州の伊達軍右目片倉小十郎現る。そして・・完。

第5章。奥州の伊達軍右目片倉小十郎現る。そして・・・（後書き）

有難うございます。有難うございます。

有難うございます。無事に更新できました。

お待たせいたして申し訳ありません（一礼）

其れではほぼ毎回のグタグタ予告風をどうぞ。（笑）

此処は米沢城。奥州伊達政宗が所有する城だ。

アレから夏美達（黒煉）は政宗の所で世話になることになった。

無論其処には同盟組（組んだ？）の武田そして徳川の姿もありそして宴会が開かれていた。

一方、まだ黒煉状態の夏美は縁側で1人タバコを吸いながら、昼間見た男の

事を過らせていた。

ー・・伝説の忍びもその男の側にいたと言う事は、あの男の雇われ主？

それとも・・・別の？ー

ーしかし、石田三成と言い、あの男と言いどうも、読めねェな、ー

すると天井裏から「黒煉のあ～ねさん！」とひょこっとメグナが現れた。

黒煉はフッと笑い「・・ありがとうよ。ご苦労さん。で？‘何か分かったかい？’メグちゃん？」

メグナ天井裏からストっと降りてきて「・・黒煉の姉さんが見た男は松永弾正久秀って奴みたいだよ。」

黒煉「・・松永弾正久秀？戦国のきょう雄って呼ばれて・・・類なる智謀と軍才を持っていると言われている男？まァ・・どうしてそう呼ばれているかは私しゃァも分からんが・・。」

メグナフッと笑い「御明察。」

黒煉タメ息をつき「で、どうしてその軍才さんが私しゃァの事？」

メグナはタメ息をつき「・・‘多分私しゃァ様達が異世界から来たと言う事を知っていたんじゃないかな？’」

其れを聞いて黒煉は再度ため息をついて「・・‘なるほど。で？あの伝説の忍びの兄さんは？’」

メグナ「・・風魔小太郎。伝説の忍びッてえの走ってると思うけどさ、多分、‘あの男に雇われているっぽい’よ。」

黒煉はタバコを再度口に加え直し「・・・‘そうかい。’」

まずいな。此れは基本的に夏美（相棒）の体だ。

此れが他の大名に知れ渡ったら・・・・。

今知っているのはとりあえず竜の大将と竜の副大将。そして伊達軍、武田（真田軍）徳川軍そして・・・・・・・石田三成の兄さん位だ。

知られちゃぁまずいな。此れ以上・・。

何せ、私しゃァの‘力は下手すりゃァ光そして闇をも包み込んでしまうからな。’

一方、奥州の米沢城を遠目で見た男がいた。

先程、黒煉に倒されていたはずの石田三成だった。

三成はフッと笑い「・・・‘此処に身を寄せていたか。’黒煉。」

ー殺しはしない。只・・貴様をあの小娘（橘夏美）を伊達においておくには

勿体ないと思ったのでなー

ー‘貴様に拒否権はない’ー

するとその後ろでは愛海がいた。

・・・石田三成か。

すると三成は愛海の気配を察知したのか「・・・‘其処にいる伊達の忍び。いるのだろ？出て来い。’」

愛海はそれを聞いて驚きながらもクナイを持ち三成の前に立ちはだかった。

「・・流石だな。石田三成。‘気配を消したのにも拘らず’‘こうもあっさりと私の気配を見抜くとは・・’。」そして「・・・‘無断で奥州の地に入った事を後悔するがいい。’」すると「ちょ～！タンマ！！」

とメグナが割って入って来て愛海に小声で「・・‘今片倉の旦那様がお呼びだよ。ひとまず悔しいだろうけど引いてくれるかい？’」

愛海はそれを聞いて頷きクナイを懐にしまいこみ石田三成を見て「・・‘今回ばかりは命拾いしたな。’」そう言い消えて行った。

そしてメグナも「さぁ～てと！私しゃァ様も撤収撤収っと・・言いたい所だけど、ダメかしら？」と苦笑いしていた。

気がつけば石田三成がメグナの前に地面との所に刀を突き刺し立っていた。

そしてメグナは心の中で・・・。

あははァ～私しゃァ様此れって転職した方がいいのかもしれないかしらァ？

と呟いていた。

メグナ「第６章。崖の上で黒煉（夏美）達を見ていた謎の男・・そして、再度石田三成今度は奥州に現る？」

「次章もどうぞ宜しくね～。」

有難うございます。以上です。次章もどうぞ宜しくお願い致します。

第6章。崖の上で黒煉（夏美）達を見ていた謎の男・・そして、再度石田三成今

有難うございます。有難うございます。

今章はですね。主に黒煉が中心となる予定でいます。今の所・・。

長丁場のひょっとしたらほぼ毎回の残酷シーン等あり予定です。

メ：今の所その予定なんだよ～。

ラ：ひょっとしたら代わる可能性あるよ。

夏：・・何せ此処の作者は気まぐれやだからな笑

・・・！！ちょっと！！其れは無いでしょ！？汗

美：其れでは第6章お楽しみください。

第6章。崖の上で黒煉（夏美）達を見ていた謎の男・・そして、再度石田三成

此処は米沢城。奥州伊達政宗が所有する城だ。

アレから夏美達（黒煉）は政宗の所で世話になることになった。

無論其処には同盟組（組んだ？）の武田そして徳川の姿もありそして宴会が開かれていた。

一方、まだ黒煉状態の夏美は縁側で1人タバコを吸いながら、昼間見た男の

事を過らせていた。

ー・・伝説の忍びもその男の側にいたと言う事は、あの男の雇われ主？

それとも・・・別の？ー

ーしかし、石田三成と言い、あの男と言いどうも、読めねェな、ー

すると天井裏から「黒煉のあ～ねさん！」とひょこっと佐助とアレから偵察を終えたと同時に崖の上からのぞいていた男が気になり調べさせるように言ったメグナが現れた。

黒煉はフッと笑い「・・ありがとうよ。ご苦労さん。で？、何か分かったかい？、メグちゃん？」

メグナ天井裏からストっと降りてきて「・・黒煉の姉さんが見た男は松永弾正久秀って奴みたいだよ。」

黒煉「・・松永弾正久秀？戦国のきょう雄って呼ばれて・・・類なる智謀と軍才を持っていると言われている男？まァ・・どうしてそう呼ばれているかは私しゃァも分からんが・・。」

メグナフッと笑い「御明察。」

黒煉タメ息をつき「で、どうしてその軍才さんが私しゃァの事？」

メグナはタメ息をつき「・・‘多分私しゃァ様達が異世界から来たと言う事を知っていたんじゃないかな？’」

其れを聞いて黒煉は再度ため息をついて「・・‘なるほど。で？あの伝説の忍びの兄さんは？’」

メグナ「・・風魔小太郎。伝説の忍びッてえの走ってると思うけどさ、多分、‘あの男に雇われているっぽい’よ。」

黒煉はタバコを再度口に加え直し「・・・‘そうかい。’」

まずいな。此れは基本的に夏美（相棒）の体だ。

此れが他の大名に知れ渡ったら・・・・。

今知っているのはとりあえず竜の大将と竜の副大将。そして伊達軍、

武田（真田軍）徳川軍そして・・・・・・・石田三成の兄さん位だ。

知られちゃぁまずいな。此れ以上・・。

何せ、私しゃァの‘力は下手すりゃァ光そして闇をも包み込んでしまうからな。’

一方、奥州の米沢城を遠目で見た男がいた。

先程、黒煉に倒されていたはずの石田三成だった。

三成はフッと笑い「・・・‘此処に身を寄せていたか。’黒煉。」

ー殺しはしない。只・・貴様をあの小娘（橘夏美）を伊達においておくには勿体ないと思ったのでなー

ー‘貴様に拒否権はない’ー

するとその後ろでは愛海がいた。

・・・石田三成か。

すると三成は愛海の気配を察知したのか「・・・‘其処にいる伊達の忍び。いるのだろ？出て来い。’」

愛海はそれを聞いて驚きながらもクナイを持ち三成の前に立ちはだかった。

「・・流石だな。石田三成。‘気配を消したのにも拘らず’‘こうもあっさりと私の気配を見抜くとは・・’。」そして「・・・‘無断で奥州の地に入った事を後悔するがいい。’」すると「ちょ～！タンマ！！」

とメグナが割って入って来て愛海に小声で「・・‘今片倉の旦那様がお呼びだよ。ひとまず悔しいだろうけど引いてくれるかい？’」

愛海はそれを聞いて頷きクナイを懐にしまいこみ石田三成を見て「・・‘今回ばかりは命拾いしたな。’」そう言い消えて行った。

そしてメグナも「さぁ～てと！私しゃァ様も撤収撤収っと・・言いたい所だけど、ダメかしら？」と苦笑いしていた。

気がつけば石田三成がメグナの前に地面との所に刀を突き刺し立っていた。

そしてメグナは心の中で・・・。

あははァ～私しゃァ様此れって転職した方がいいのかもしれないかしらァ？と呟いていた。

三成はメグナに「・・・貴様。‘橘夏美のクノ一’だな？」

メグナギクとなりながらも苦笑いし「・・・‘そうだよ？’で？何用で？」

すると三成は懐から手紙を取り出しメグナに渡しながら「・・‘これを貴様の主君の所に持って行け。’‘貴様に拒否権はない！’」

メグナは軽くため息をつき「了解っと。」と同時に「刀・・・はずしてくれない？このままだと通れないよ？」

三成はそれを聞いて刀をその場から離して鞘に収めた。

メグナは三成から手紙を受け取りそして懐にしまいこみその場をすばやく去った。

ーやれやれ。面倒なことになったねェ。色々な意味でーと呟いていた。

と同時に米沢城に戻り軽くため息をつきメグナは黒煉（夏美）を探して再度縁側にいた事を確認し

再度声をかける。

と同時にすっかり夏美に戻っていてメグナは石田三成の文を夏美に事情を話しながら渡す。

夏美はひきつり笑いしながら受け取ると「・‘部屋で確認する’。」そう言い政宗に与えら得れた自室に戻って行った。

そして政宗に与えられた自室の中でタバコに火を灯しながら三成からもらった手紙を見て軽く舌打ちし

「・・・‘狙いをつけられたか。’」と呟いていた。

・・まずいことになったな。ある意味。と心の中でも呟いていた。

第６章。崖の上で黒煉（夏美）達を見ていた謎の男・・そして、再度石田三成今度は奥州に現る？完。

第6章。崖の上で黒煉（夏美）達を見ていた謎の男・・そして、再度石田三成今

有難うございます。有難うございます。

無事に更新完了致しました。

お待たせいたしました。

其れではほぼ毎回のグタグタ予告風？をどうぞ。

すると、夏美の部屋の天井裏に何かを感じたのか夏美は小刀を取り出し天井裏へと突き付けた。

と同時に小太郎が現れた。

夏美軽く舌打ちし「・・また、お前さんか、？」

小太郎は再度クナイを構えて夏美に突進して行った。

夏美タバコを携帯灰皿にもみ消し翡翠刀を持ち小太郎のクナイを受け止めた。

一方、宴会場にいたライカと美零は夏美の気が若干不安定なのを感じ・・。

美零はライカに小声で「・・ライカ。」

ライカ頷き「了解っと。」そう言い政宗達に事情を話し夏美の所へと行った。そして美零もメグナを迎えさせた。

そして夏美の部屋にライカは入り驚きながら「・・・！！！な、何で！？此処にいるんだ！！！！！！！！風魔ァァ～～！！！！」と叫んだ。

一同唖然として小十郎「な？ふ、風魔だと！？」

美零も驚き「政宗様！！！皆皆さま！！御前失礼！！」と同時に「夏美様ァァ！！！」と叫びながら夏美の下に向かった。

そして「来るんじゃねぇェェ～！！此処に今来ると危険だァ！！！」と夏美の叫び声も交差した。

すると狂が村正を持ちながら立ち上がり「・・伊達の大将所で‘暴れる何ざァいい度胸してるじゃねェか。’その忍び。伝説の忍びか何ざァ知らねェが・・俺がただじゃァすまさねェぜ。」そう言い夏美の部屋に向かった。

政宗はそれを見て苦笑いし「・・ありゃァ狂の奴多分切れてんな。」と続け様に「小十郎。‘歓迎してやれ’」

小十郎は頷き「承知！」そう言い席を立った。

ライカ「第7章。メグナから夏美へと突然渡された石田三成からの手紙そして・・伝説の忍び風魔小太郎再び！？」

「次章もどうぞ宜しくね！」

以上です。有難うございました。

オマケ・・・。

夏：何で私しゃァだけ？笑；；；；；

ラ：・・・さァ笑；こっちが聞きたいさ相棒笑；

第7章。メグナから夏美へと突然渡された石田三成からの手紙そして・・伝説の

有難うございます。

久々の更新ですかね・・・。

予めご了承くださいほぼ毎回ですが今章も残酷シーン等あり予定です。

さて・・今章は?

ラ:私しゃァ達がこの世界に飛ばされて数日もたたずに相棒の所に何とあの石田三成からの手紙が届けられた。

メ:夏美の姉さんは私しゃァ様からその手紙をもらい驚きそして伊達の旦那様に充てられた自分の部屋に行き内容を確かめた。

美:と同時に・・何と先程夏美様の前に現れた伝説の忍び風魔小太郎が現れた。

片:其処でだ・・夏美の奴また案の定風魔の奴とやりあう羽目になっちまった。

ラ:狂の兄さんが夏美を救いに?夏美の部屋に向かってくれたけど・・・・。

クソ！相棒！！無事でいてくれよ！？

メ：・・其れでは其れでは第7章始まり始まり～。

其れではお楽しみください。

第7章。メグナから夏美へと突然渡された石田三成からの手紙そして・・伝説の

すると、夏美の部屋の天井裏に何かを感じたのか夏美は小刀を取り出し天井裏へと突き付けた。

と同時に小太郎が現れた。

夏美軽く舌打ちし「・・・また、お前さんか、？」

小太郎は再度クナイを構えて夏美に突進して行った。

夏美タバコを携帯灰皿にもみ消し翡翠刀を持ち小太郎のクナイを受け止めた。

一方、宴会場にいたライカと美零は夏美の気が若干不安定なのを感じ・・・。

美零はライカに小声で「・・ライカ。」

ライカ頷き「了解っと。」そう言い政宗達に事情を話し夏美の所へと行った。そして美零もメグナを迎えさせた。

そして夏美の部屋にライカは入り驚きながら「・・・！！！な、何で！？此処にいるんだ！！！！！！！！風魔ァァ～～！！！！」と叫んだ。

一同唖然として小十郎「な？ふ、風魔だと！？」

美零も驚き「政宗様！！！皆皆さま！！御前失礼！！」と同時に「夏美様ァァ！！！」と叫びながら夏美の下に向かった。

そして「来るんじゃねぇェェ～！！此処に今来ると危険だァ！！！」と夏美の叫び声も交差した。

すると狂が村正を持ちながら立ち上がり「・・伊達の大将所で、暴れる何ざァいい度胸してるじゃねェか。，その忍び。伝説の忍びか何ざァ知らねェが・・俺がただじゃァすまさねェぜ。」そう言い夏美の部屋に向かった。

政宗はそれを見て苦笑いし「・・ありゃァ狂の奴多分切れてんな。」と続け様に「小十郎。‘歓迎してやれ’」

小十郎は頷き「承知！」そう言い席を立った。

一方夏美は相も変わらず小太郎とやり合っていた。

流石の夏美にも焦りがともる。

そして心の中で・・・・。

チィくしょう！流石は伝説の忍び・・・そう簡単に事は込んでくれないか・・・。

かと言って黒煉の奴にバトンタッチする訳にもいかねェし・・ほぼ毎回。

こうなったら、赤刀、に頼るか？？？

それとも・・・・・・。すると小太郎も容赦なく夏美に斬りかかって行く。

夏美は左腕をかばう。

炎龍(アレ)化を避けるかのように・・・。

クソッ！！いったいどうすれば！！！！！！

すると行き成り小太郎に雷が下った。

小太郎は避けた。だが・・思わずくらってしまう。

と同時に「・・伝説の忍びよォ。政宗様の領地で暴れるとは一体どういう了見だァ？？？」とどすの利いた声が夏美の部屋に響き渡った。

其れを聞いた夏美は思わずその声の主の所に眼をやり「か、片倉様！！！！？」

何と其処には極殺状態になった小十郎だったのだ。

そして極殺状態になった小十郎は小太郎を思いっきり蹴り飛ばした。

と同時に雷風が舞った。

夏美はそれを見て只驚き「す、すげ～な。」と口をぽかんとあけていた。

と同時に狂も夏美の部屋に入り「夏美。大丈夫か！？」

夏美はっと我に戻り頷き「大丈夫です。狂様。」と同時に片倉様が・・・。とも言い狂は前を向き苦笑いし「ありゃァ・・‘極殺になってるな。’片倉の副大将」と呟いた。

小十郎は小太郎に対して「・・・覚悟はできてるだろうなァ？伊達に手ェ出した事後悔させてやろうじゃねェか。」と睨みつけながら言った。

そして狂も村正を構えて「・・・‘チィとオイタすぎた見てェだなァ？’伝説の忍びの兄さんよ。伊達の大将の所でオイタすぎた事後悔するがいいぜ？」

と共に再度メグナが夏美の下に戻り小太郎を見て「・・・‘うちの姉さんが世話になったみたいだね？’‘チィと此処までされちゃァ流石の私しゃァ様も黙ってられねェかな？と’。」とクナイ用意して

「・・・‘覚悟いいかな？’」とニコリとほほ笑んだ。

夏美はそれを見て苦笑いし心の中で・・。

ありゃァメグナの奴切れてんなと呟いた。

第7章。メグナから夏美へと突然渡された石田三成からの手紙そして・・伝説の忍び風魔小太郎再び！？

完。

第7章。メグナから夏美へと突然渡された石田三成からの手紙そして・・伝説の

有難うございます。

無事に更新完了致しました。

其れではほぼ毎回のグタグタ予告風をどうぞ笑

アレから、奥州に入った夏美達を待ち受けていたのは伝説の忍びと呼ばれた

風魔小太郎だった。

しかも・・夏美自身が政宗自身にあてられていた部屋に侵入していたのだ。

その騒ぎを聞きつつ政宗の命令で小太郎を迎え撃つ極殺状態の小十郎と

狂が入り仕舞には夏美の所のクノ一のメグナまで参戦した。

一対三だったが・・・。

夏美自身も翡翠刀を持ち「・・・・・‘何の目的で私しゃァを狙っているかしらねぇが・・・’‘奥州（此処）には恩がある。’その恩をあだで返す何ざァ・・うちらワカバのルール（流儀）’に反する

ってもんよ。」と続け様に
「ま、一対四っうのも不平等だが・・風魔さん貴方にとっては別に‘どうって事もないだろう？’」とニヤリと笑みをつくってそして
「・・後、貴方は
チィとうちのクノ一（相棒）を怒らせたみたいだ。切れると大変だから引き下がる事お勧めするぜ？普段温和かだが・・切れると‘大変’だよ。」とタバコに再度火を灯し翡翠刀を小太郎の前に突きつけた。

そして「・・後‘俺も’な？」

其れを聞いたメグナ切れながらも内心苦笑いしながら・・。

あ～ァ夏の姉さんも人の事言えないじゃんと呟いていた。

メグナ「第８章。風魔小太郎対奥州４人組？」

「次章も宜しくね～。」

以上です。有難うございました。

第8章。風魔小太郎対奥州4人組？（前書き）

ずいぶんご無沙汰しました（汗）

有難うございます。

橘：本当さね笑；

ラ：だな笑

メ：だね～。さてと・・今回はね、前章の後半みたいなものだよ。

美：・・夏美様が大変なことに汗

橘：・・ど～も此処の作者は私しゃァを危険？な目に合わせたいらしい笑

・・そんなことないですよ？笑；

橘：ま・・いいか。（タバコに火を灯し）さてと・・第8章開始さね。

ラ：最後まで宜しくな。

メ：前章同様に残酷シーン等編集可能性等あり予定だからその辺もご了承ね～。

さてと・・始めましょ♪

第8章。風魔小太郎対奥州4人組？

アレから、奥州に入った夏美達を待ち受けていたのは伝説の忍びと呼ばれた
風魔小太郎だった。
しかも・・夏美自身が政宗自身にあてられていた部屋に侵入していたのだ。

その騒ぎを聞きつつ政宗の命令で小太郎を迎え撃つ極殺状態の小十郎と
狂が入り仕舞には夏美の所のクノ一のメグナまで参戦した。
一対三だったが・・・。

夏美自身も翡翠刀を持ち「・・・・‘何の目的で私しゃァを狙っているかしらねぇが・・・’‘奥州（此処）には恩がある。’その恩をあだで返す何ざァ・・うちらワカバのルール（流儀），に反するってもんよ。」と続け様に
「ま、一対四っうのも不平等だが・・風魔さん貴方にとっては別に‘どうって事もないだろう？’」とニヤリと笑みをつくってそして
「・・後、貴方は
チィとうちのクノ一（相棒）を怒らせたみたいだ。切れると大変だから引き下がる事お勧めするぜ？普段温和かだが・・切れると‘大変’だよ。」とタバコに再度火を灯し翡翠刀を小太郎の前に突きつけた。

そして「・・後，俺も，な？」

其れを聞いたメグナ切れながらも内心苦笑いしながら・・。

あ～ァ夏の姉さんも人の事言えないじゃんと呟いていた。

一方小太郎は其れを見てもびくともしなかった。

其れと同時に夏美自身小太郎を見て心の中で、流石は伝説の忍びか。

此れしきでは動じないか。

と共に翡翠刀を構えて「・・・橘夏美いざ参る。」そう言いダンと足を踏んで小太郎に突進していった。

そして小太郎もクナイで応戦して行った。

ガキィンガキィン！ガキィィン！！！とお互いの刃が交わる音がする。

夏美は心の中で軽く舌打ちし

流石は、‘伝説の忍び’と呼ばれた男だね。そん所其処らの連中と訳が違う！！！！！

素早い！！！！

すると一瞬風が舞い夏美は吹っ飛ばされた。

と同時に壁に激突する。

ライカはそれを見て「相棒！！！」と慌てて夏美の所に向かった。

夏美はライカを見てフッと笑い「大丈夫だ。相棒。」そう言い「流石は、‘伝説の忍び’と呼ばれたことあるね。だが・・・・・。」夏美は翡翠刀を鞘に収め雷月を取り出した。

そして雷月を鞘から抜き構えて「・・・‘今度は俺の番だな’。」「雷月流神派・・・雷神（ライジン）！！」と雷をまとわせ小太郎に向けてはなった。

と同時に小太郎自身も吹き飛ばされていつの間にか消えていた。

夏美はそれを見て軽く舌打ちし「・・・‘逃げ足も速いんだな。’‘伝説の忍びさんは。’」そう言いタバコに火を灯し雷月を鞘に収めた。

と同時に「・・‘一体何しに来たんだ??’」と続け様に「・・‘まさかな’。」と呟いた。

そして美零が「夏美様。」

夏美はそれを聞いて頷き「・・‘あァ。目的は何だかしらねェが・・ワカバに手ェ出したんだ。蹴りはちゃんと付けさせてもらわないとなァ。’」

ライカその様子を見て心の中で・・

あァ・・・相棒絶対にありゃァ切れてるよ。と苦笑いした。

そしてライカは軽くため息をつきながら苦笑いし「・・‘落とし舞え’だろそれ言うなら相棒。」

夏美其れを聞いてフッと笑い「・・そうだったな。」と続け様に「しかし・・。」

風魔小太郎が私しゃァ達の所に来たのは此れで2回目だ・・・。

いったい何のために？と心の中で呟いた。

と同時に美零が「・・夏美様？」

夏美我に戻りフッと再度笑い「・・・いや、何でもねぇ。」と同時に「心配かけたな。」と言った。

美零は首を横に振り「とんでもございませぬ。貴女様をお守りするのがこの美零の役目ですから。」と

にこやかに夏美を見て言った。

すると狂が笑いながら「・・美零の嬢ちゃんまるで女版片倉の副大将見てェだな。」と言った。

小十郎はそれを聞き苦笑いして「・・・まァ確かにな。」と言った。
と同時に「狂。」

狂は頷き「分かってら・・伊達の大将にひとまず報告だな。」

小十郎狂を見て「・・頼む。」

狂はそれを聞いて頷き「了解した。」政宗の所に向かった。

第８章。風魔小太郎対奥州４人組？完。

第８章。風魔小太郎対奥州４人組？（後書き）

有難うございます。此方も無事に更新完了致しました。

遅くなりましたが・・其れではほぼ毎回の？グタグタ予告風をどうぞ笑

宴が終わり・・狂は先程の事を政宗に報告していた。

政宗はそれを聞いて「Ａ～ｈａ。風魔の野郎がね。」

狂は続け様に「・・あいつの前に現れたのは此れで実は二度目なんだ伊達の大将。」

政宗其れを聞いて「Ｗｈａｔ' ｓ？其れは本当か？狂？」

狂頷いた。そして「あいつらと初めて会った日だ。風魔の奴松永に雇われているらしい。それで・・。」

政宗軽く舌打ちし「・・‘異世界から来た’と言う事で恐らく目ぇ付けられた見てェだな。」

するとメグナが天井裏から現れて「ちょ～イと失礼しますよっと！」

政宗は「どうした？」

メグナは政宗を見て「・・実はさ、言いずらいんだけどチィと悪い情報が・・・。」

狂はメグナを見て政宗に目線を映し「・・いいよな？伊達の大将？」

政宗頷き「言ってい見ろ。」

メグナは顔しかめて「・・愛海の姉さんから聞いているかもしれないけど・・実はね、石田三成の旦那さんも姉さん狙っているみたいなんだ。」

其れを聞いた政宗達は驚いた。

と同時に政宗は「小十郎！愛海！！」と2人の家臣の名を呼んだ。

すると小十郎が「ハッ！此処におります！！」そう言い政宗の前に愛海と共に現れた。

そして「メグナの報告は・・確かか？」

小十郎は愛海を見て「・・愛海から報告受けた故そしてその場にメグナもいたらしいので確かかと・・・。」

政宗は頷き「Ｉ　ｓｅｅ・・。」

松永と石田三成・・厄介な相手だぜ。

そしてメグナに「・・主はどうしてる？」

メグナ「・・多分自分の部屋にいると思う。姉さんの事だから顔しかめて難しく考えているかも・・。」

そして政宗は「ｓｏｒｒｙ。呼んで来てくれるか？」

メグナは頷き「了解っと！じゃ少々お待ちを・・。」そう言い天井裏に戻って行った。

メグナ「第９章。風魔小太郎の襲撃後・・政宗への報告。そして・・。」

「次章もどうぞ宜しくね～。」

以上です。有難うございました。

第9章。風魔小太郎の襲撃後・・政宗への報告。そして・・。（前書き）

ご観覧頂きありがとうございます。

今章は前章の後編みたいなものです。

橘：今回は宴後の私しゃァ達の事筆頭に伝える所から始まるよ。

ラ：しかし、何で・・・松永と石田三成ッて人に目ぇ付けられたのかね。

橘：多分、私しゃァ達が、異世界から来た。，って事で興味持たれたんじゃねェの？笑

メ：ちょいと姉さん其処笑う所じゃないって汗

美：・・ま、兎に角だ。危険な事には代わりはないって事だ。

メ：だね汗と言う訳で毎度のことながら編集長丁場等あり予定だからその変もどうぞ宜しく。

橘：じゃ・・そろそろ本編に入りますかね。

第9章。風魔小太郎の襲撃後・・政宗への報告。そして・・・。

宴が終わり・・狂は先程の事を政宗に報告していた。

政宗はそれを聞いて「Ａ～ｈａ。風魔の野郎がね。」

狂は続け様に「・・あいつの前に現れたのは此れで実は二度目なんだ伊達の大将。」

政宗其れを聞いて「Ｗｈａｔ' ｓ?其れは本当か?狂?」

狂頷いた。そして「あいつらと初めて会った日だ。風魔の奴松永に雇われているらしい。それで・・。」

政宗軽く舌打ちし「・・‘異世界から来た’と言う事で恐らく目ぇ付けられた見てェだな。」

するとメグナが天井裏から現れて「ちょ～イと失礼しますよっと!」

政宗は「どうした?」

メグナは政宗を見て「・・実はさ、言いずらいんだけどチィと悪い

情報が・・・。」

狂はメグナを見て政宗に目線を映し「・・いいよな？伊達の大将？」

政宗頷き「言って良い。」

メグナは顔しかめて「・・愛海の姉さんから聞いているかもしれないけど・・実はね、石田三成の旦那さんも姉さん狙っているみたいなんだ。」

其れを聞いた政宗達は驚いた。

と同時に政宗は「小十郎！愛海！！」と2人の家臣の名を呼んだ。

すると小十郎が「ハッ！此処におります！！」そう言い政宗の前に愛海と共に現れた。

そして「メグナの報告は・・確かか？」

小十郎は愛海を見て「・・愛海から報告受けた故そしてその場にメグナもいたらしいので確かかと・・・。」

政宗は頷き「Ｉ　ｓｅｅ・・・。」

松永と石田三成・・厄介な相手だぜ。

そしてメグナに「・・主はどうしてる？」

メグナ「・・多分自分の部屋にいると思う。姉さんの事だから顔しかめて難しく考えているかも・・。」

そして政宗は「ｓｏｒｒｙ。呼んで来てくれるか？」

メグナは頷き「了解っと！じゃ少々お待ちを・・。」そう言い天井裏に戻って行った。

一方、夏美はアレから両腕を組みながらじっと座りこみ考え事をしていた。

ライカ達はそれを見るだけだった。

そして天井裏でメグナが「夏のあ～ねさん！」ひょっこり出てきた。

夏美はおうわ汗と焦りの声を出し「きゅ、急に出てくるんじゃねェよ。」と焦りながら言った。

メグナは苦笑いし「ごめんごめん。」と同時に「チィと考え中でごめんよ～。伊達の旦那様がお呼び。」

夏美はそれを聞いて「何？筆頭が？分かった。今行く。」そう言いライカ達に此処にて欲しいと告げ

ライカ達は頷き部屋を後にした。

そして政宗の部屋に付き両手両膝をつき一礼し「・・・筆頭。お待たせ致しました。橘夏美只今参上つかまりました。」

政宗はそれを聞いて「Ｏｋａｙ。Ｃｏｍｅ　ｏｎ！」と入室を促す。

夏美は襖を開け「失礼致します。」そう言い入り襖を閉じて政宗の所へ行き正座をした。

政宗は夏美を見て「ｓｏｒｒｙ。突然呼び出してな。」

夏美首を軽く横に振り「いえ。とんでもございませぬ。」と続け様に「いかがなさいました？」と聞く。

すると政宗は夏美を見て「・・・チィとｔｒｏｕｂｌｅ。な予感がするんだ。」と言った。

夏美自身も其れを聞いて心の中で、松永さんと石田さんって人関連かな。やっぱり・・・。

面倒でーな事（メン）になったぜ。ある意味。さてどうしようか。

夏美は只アレから考え事をしていた。

と同時に政宗達を見て「・・・‘この夏美めもなんかしら嫌な予感がする’そんな気がしてなりませぬ・・。」と呟いた。

と同時にワカバの他のメンバーも此方にまた何名かトリップしていた。

そして「か、頭ァァァァ！！！！」「リーダー！！！！」と叫び声がした。

と同時に美零の「やかましい！！アンタ達！！夏美様は今政宗様の所にいられる一体何事だ！？」

「さ、狭川様！！！た、大変です！！一大事ッス！！」

美零はその事を聞いて「おう！聞こう！！」とメンバーを見て言った。

「ゆ、有理様もいつの間にかこの世界にお見えになられたらしく・・・い、石田三成と思われる男と

運悪く鉢合わせしてしまったみたいで・・名を聞かれて答えたら・・・さ、攫われたみたいで・・・。」

美零はそれを聞いて驚いていた。

・・・な！？ゆ、有理様が！？この世界に！？

すると、行き成り襖音がスパーンとなった。

其処には先程、政宗達と話していた夏美が翡翠刀を握りしめていた。

美零驚いて「・・夏美様！」

夏美は軽く舌打ちして「・・石田三成。妹をさらうとは・・・許しがたい！！！！！！！」

すっかり政宗の部屋だと言う事を怒りで忘れていた。

政宗は軽くため息をついて「Ｈｅｙ！夏美　ｃｏｏｌｏｆｆだ。あまり焦ると、普段ちゃんと見えるもんも見えなくなっちまうぜ？，」と夏美を見て言った。

夏美はその事を聞いてはっと我に戻って「・・大変に申し訳ございませぬ。筆頭。、妹の事になると居てもいられなくなるのです・・。

どうしても。’」

政宗はそれを聞いて「・・ｙｏｕｎｇｓｉｓｔｅｒだと？」

夏美頷き「・・恐らく私達の世界でトラブル有り妹も此方に来たのでしょう。」

そして再度夏美は拳を握りしめて「・・其れにあいつは私の‘たった1人の血のつながった家族。’あいつは、‘失う訳にも行かないんです。’」

その事を聞いた政宗達は何か切なさそうな顔をして夏美を見ていた。

夏美ギリッと口を咬んで「・・石田三成。妹にちょっかい出したら・・承知しねぇからな！！！」と再度

手を握り締めた。

‘私しゃァは、大切なもんをまた守りきれねぇのかよ！！！！！！’

父さん達と約束したのに・・・。

‘私しゃァはいつもそうだ！！！！’‘肝心な時に護り切れていねェ！！’と翡翠刀を握り締めている拳とは別にもう片方の拳を握りしめていた。

・・有理。頼む無事でいてくれよ？？？？と心底願うばかりであった。

第９章。風魔小太郎の襲撃後・・政宗への報告。そして・・。完。

第９章。風魔小太郎の襲撃後・・政宗への報告。そして・・。（後書き）

ご観覧頂きありがとうございます。無事にまた再度更新できてよかったです。あいもからず遅いですが温かな目で見守って頂ければ幸いです。

其れではほぼ毎回のグタグタ予告をどうぞ。

此処は、大坂城のとある部屋。

１人の女が寝かされていた。夏美の実の妹有理である。

有理自身も広州の術にはまってしまいこの戦国の世に飛ばされてしまったのであった。

其れを偶然に三成に見られてしまい名を聞かれて答えたら攫われてしまって今に至ると言う。

そして、有理が目を覚める。と共に辺りを見渡し「・・・此処は？」と同時に「気がついたか。橘有理。」と三成の声が響いた。

有理「第１０章。夏美の実の妹有理戦国に参上。そして着いた途端三成に攫われる！」

「次章もどうぞ宜しくお願い致します。」

以上です。有難うございました。

第１０章。夏美の実の妹有理戦国に参上。そして着いた途端三成に攫われる！？

ご観覧頂きありがとうございます。

メ：・・・今回は早速いや～な方向↑

橘：・・・まさかあいつも此処（戦国）に来ちゃうとはな・・・。

ラ：・・・仕舞には、ついたそうそう有理の身に危険が！？

橘：・・・・・妹に手出ししたらただじゃ済まされねぇぞ！？

メ：姉さん！！言葉若干違う！

美：其れでは・・・第１０章。更新等は恐らくほぼ毎回ゆっくりと思われますが大目にそして残酷シーン等もひょっとしたら相も変わらずあると思いますのでご理解とご了承の上お楽しみ頂ければと思います。

メ：美零の姉さんが一番落ち着いている！！？

第１０章。夏美の実の妹有理戦国に参上。そして着いた途端三成に攫われる！？

此処は、大坂城のとある部屋。

１人の女が寝かされていた。夏美の実の妹有理である。

有理自身も広州の術にはまってしまいこの戦国の世に飛ばされてしまったのであった。

其れを偶然に三成に見られてしまい名を聞かれて答えたら攫われてしまって今に至ると言う。

そして、有理が目を覚める。と共に辺りを見渡し「・・・此処は？」

と同時に「気がついたか。橘有理。」と三成の声が響いた。

三成の声を確認するない否や有理は体をこわばらせて警戒をしていた。

三成その様子を見てフンと笑いながら有理に近づいて行った。

「安心しろ。斬滅はしない。貴様は・・しばらくここにいてもらおう。」と同時に有理を抱き寄せて耳元で「・・・、この私の側にな。，」

有理はそれを聞いて両目見開きながらも三成に「・・・拒否権は？」

三成はニヤリと笑い「ない。」と言いきった。

有理は三成を見るとこの男の人、本当にヤバイ！！、ヤバい匂いがする！！！！！！！

・・・姉さん。助けて。助けて。お願い皆。

するとドカーーーーーーーーーーーーーーーーン！と爆発音がした。

すると1人の兵士が慌ててきて「み、三成様！！！」

三成はその兵士に対して「何事だ？」

その兵士は慌てて「き、奇襲でございます！！！！」

三成は続け様に「敵の数は？」

兵士はその事を聞いて「は、そ・・・其れが・・・・・。」

「有理ィイイイイイ！！！！何処だァァァァ！！何処にいる！！！！！？」と同時に「どきやがれェェェェエ！！！てめェ等はお呼びでねェェんだよ！！！」

と炎と雷が舞った。

そしてライカは苦笑いして「あ～ァ。ありゃァゼッてい相棒（夏美）炎殺（アレになってるよ）」と呟いた。

「オウラァァァァァァァァ！！！！！！！！！」と体一つで敵をなぎ倒していく。

兵士は「ふ、２人です！！！２人！！」と同時にその兵士も吹き飛ばされた。

そして煙ぼこりが舞いてタバコに火を灯す音がした。

三成はその様子を見てニヤリと楽しそうに笑い「・・・‘来たか。橘夏美。’」と楽しそうに呟いていた。

其処には炎と雷をまとった夏美の姿があった。

夏美は三成を見て「・・・・‘お前さんが石田三成か？’」と続け様に歩きながら「・・・こんな事いいたかねェんだが‘妹を餌にして俺をおびき寄せる何ざァいい度胸してんじゃねェか’‘俺のみに手ェ出すのはかまわねェ・・だが、それ以外をされちまうと・・・いくら自分で言うのも何なんだが温和かな俺でも怒っちまうぜ？’。」

そう言い翡翠刀を取り出したと同時に夏美のクノ一である形川メグナがいつの間にか分身術で現れ有理を

連れ戻して奥州に帰っていた。

三成はそれを見てフンと笑い「・・・‘クノ一か。’まァいい。」とそして刀を鞘から抜きながら「‘貴様なら来ると思っていた。」と楽しそうに夏美を見て言った。

その様子を夏美は只只黙って見ていた。

夏美はその様子を見て軽く舌打ちして「・・・‘舐めやがって。’」と呟き三成に向かって斬りかかった。

一方、ライカはその様子を見て頭抱えて「・・・‘切れてんな。あの様子だと。’」と同時に夏美の後ろにしのびが2、3人来て夏美に斬りかかった。

ライカはそれを見て「相棒!!!!」すると・・・いつの間にか忍び達が倒れていた。

夏美はフンと笑い「・・・‘俺の勘を舐めんなよ?’」と続け様に「・・‘悪いね。お前さん等に恨みはねェんだがな・・。’」

三成はその様子を見てククと楽しそうに笑い刀を鞘から抜き始めたと同時に夏美に向かって刹那で前に出て斬りかかった。

夏美はそれを見て「・・なっ！？」

ー‘俺より速いだと！？’ー

と同時に三成「斬滅ッ！！！！」

其れと同時に夏美の体は部屋から吹き飛び庭にあった木にぶつかった。

夏美は頭を抱えて首を横に振り立ちなおした。

ライカは慌てて夏美の所に駆け寄った。

夏美は首を横に振りぶつかった所から潔く体制を整えてライカを見てフッと笑い「・・・大丈夫だ。」と同時にライカは「相棒！来るぞ！！！！」

夏美は急いで翡翠刀を構え直して「翡翠流爆風弾！！！！」と三成に攻撃するのも「号哭！！！！！」と続け様に「斬滅！！！」と相殺される。

夏美はそれを見て軽く舌打ちして「・・‘相殺か。’」と呟いた。

そして続いて「爆風烈風弾陣！！！！」と再度三成に攻撃をした。

だが、一瞬のすきをつかれたのか刹那で背後に回された。

と同時に背中から一気に斬りかかった。

だが・・ガキィイインと音がした。

ライカが氷棒を使って三成の刀をふさいでいた。

三成はそれを見て楽しそうに「・・ほう。」と呟いた。

ライカは夏美を見て「行けッ！相棒！！！此処は私が引き受けるッ！！」

夏美は両目を見開き「でもよ・・。」

ライカはさらに続けて「行けッ！大丈夫だ！気にするな！！！寧ろ多分この兄さんの目的はお前さんだ。

お前さんはワカバのリーダー兼幹部！‘ワカバの光だ！其れを忘れるなっ！！！’」

夏美は苦渋の決断をして「・・分かった。また後で会おう！相棒ッ！」そう言いながら煙だまを懐からだし投げて消えた。

三成はそれを見て軽く舌打ちしてフンと笑い「まあ、良い。次会った時にでも捕まえるか・・。」

そして、ライカは氷棒を構えて「・・さて、石田の兄さん。貴方のお相手はこのライカ・ネアンだよ。」

と三成を見て言った。

一方、夏美は大阪城から奥州へ帰還する為にひたすらひたすら走り続けていた。

・・兎に角、念の為本当に有理が奥州へ無事に帰還出来たかどうか確かめよう。

すると、だんだんと何故かしらないが急に視界が狭くなった。

夏美は驚きつつそして周りをみて警戒する。

すると、後ろから急に手刀がいれられて意識を飛ばしてしまった。

「‘少々手荒なまねだが、勘弁してくれたまえ。異世界からの御嬢さん。’」と低い男の声がした。

そして、倒れた夏美を抱えて「・・‘いやはや。まさか。まさか。此処に現れるとは思ってもみなかった。しかし、準備はしておいてよかったな。’」と楽しそうに言い霧の中に消えて行った。

夏美を連れて行った男は戦国の梟雄松永久秀だった。

よりによって政宗達に警戒しろと言われた男に捕まってしまったのだ。

一方、三成と対峙していたライカは夏美の気が不安定な事を感じたのか「・・相棒？」と心配そうに呟いた。

第１０章。夏美の実の妹有理戦国に参上。そして着いた途端三成に攫われる！？完。

第１０章。夏美の実の妹有理戦国に参上。そして着いた途端三成に攫われる！？

有難うございます。

此方も無事に更新完了致しました。

其れではグタグタ予告風をどうぞ。

アレから、三成と対立した後の夏美はライカに三成の相手を任せてひとまず奥州へと帰還していた。

だが、いつの間にか霧が出て辺りの視界が悪くなった所で行き成り案の定、

政宗達に警戒しろと言われている戦国の梟雄松永久秀に捕まってしまった。

其れは、奥州にも伝わりその事を聞いた政宗が「Ｓｈｉｔ！よりによって松永のオッサンに捕まるなんてな！！俺も読みが甘かった。」

小十郎も顔しかめて「・・この小十郎もです。一応夏美には注意しろっと

言ったんですが・・・。」

美零や有理も驚いてそして顔しかめていた。

と同時に三成と対立いていたライカが戻ってきた。

政宗「第１１章。石田三成との対立後、夏美に早速危機。」

「ｎｅｘｔも宜しく頼むぜ？Ｙｏｕ　Ｓｅｅ？」

以上です。有難うございました。

第１１章。石田三成との対立後、夏美に早速危機。（前書き）

ラ：今章は、何と・・・・あの欲望に生きる男松永さんのご登場？

メ：で、ライカの姉さんと別れて奥州に帰還する夏美の姉さんに危機が？

美：よりによって・・夏美様が汗

有：・・・・・姉さん汗

と言う訳で第１１章開幕です。

ラ：あ・・言い忘れた汗今章もほぼ毎回の事だけど残酷シーン、長丁場等あり予定だから宜しくね汗

では、今度こそどうぞ。

橘：言うのが逆じゃねえか？笑；

第１１章。石田三成との対立後、夏美に早速危機。

アレから、三成と対立した後の夏美はライカに三成の相手を任せてひとまず奥州へと帰還していた。

だが、いつの間にか霧が出て辺りの視界が悪くなった所で行き成り案の定、

政宗達に警戒しろと言われている戦国の梟雄松永久秀に捕まってしまった。

其れは、奥州にも伝わりその事を聞いた政宗が「Ｓｈｉｔ！よりによって松永のオッサンに捕まるなんてな！！俺も読みが甘かった。」

小十郎も顔しかめて「・・この小十郎もです。一応夏美には注意しろっと
言ったんですが・・・。」

美零や有理も驚いてそして顔しかめていた。

と同時に三成と対立いていたライカが戻ってきた。

そして、政宗があらかたの事をライカに説明した。

ライカは舌打ちして「・・・、今回は私に否があります。」相棒を先に行かせたから・・・。」

政宗達はそれを見て只切なさそうな顔していた。

そして外をそして空を見て「必ず助け出すッ！だから其れまで辛抱してくれッ！相棒ッ！！」

一方、此処は大和。

1つの庵があり夏美はそこで目が覚めた。

と同時に慌てて体を起こした。

頭がくらっとした。

夏美は改めて辺りを見渡した。

すると「‘お目覚めかね？’」と声かけられる。

夏美は慌てて警戒をする。

「いやはや・・そんなに警戒しないでくれたまえ。」と楽しそうに笑いながら夏美に近づくが、夏美自身も警戒心さらに強めて「・・‘何者か分からない者に警戒しないでって言われても無理があると思いますが？’」と言った。

其れを見てフッと笑いながら男は「此れまた失礼したね。私は松永久秀だ。」

その名を聞いて夏美はその名を聞いて驚いて心の中で・・・。

オイオイ・・よりによって筆頭方に‘注意しろ’と言われた男に捕まる何てな。

と思いだしながら呟いていた。

すると久秀は夏美に「さて、私の自己紹介は簡単にだが済んだ。次に卿の名を聞こうか？‘異世界からの御嬢さん？’」と楽しそうに夏美に言った。

夏美は軽く舌打ちし「・・‘其処まで知られているんですね。’」そして久秀を警戒も忘れずに見て

「・・私の名は、夏美。橘夏美。以後おみしりを気を。」と紹介した。

久秀は夏美を見ると「ほう・・卿が橘夏美か。‘闇の始末屋炎龍’と呼ばれ‘黒煉’を宿している少女は卿だったのだね。」

夏美は両目を見開き驚いた。

その様子を見た久秀は楽しそうに夏美に歩みより「・・‘そして、その闇をつくったのは嘗ての姉貴分だと言う。’」

な!?、何故其処まで知っている!?その様子を見た久秀はフッと笑い夏美の耳元でこう囁いた。

ー卿は、表の世界で楽しいかね?ー

夏美の頭の中で、警戒音、が鳴った。

ヤバい!!この男(ヒト)・・・色々な意味で物凄く危険だ!!

恐らく石田三成以上に・・・・・。

逃げないと・・・!!!

すると、久秀は勘付いたのか香を夏美にかがせ体の動きを少しだが制限した。

う・・動かない汗

久秀はフッと笑い「・・逃がさないよ。私は卿に興味を持った・・そしてようやく手に入れたのだ。

そうやすやす逃がすつもりなど無いよ。」

夏美は苦笑いして「・・・‘戦国（此処に来てから）厄介続きだね。’」と呟いた。

面倒事（メンデー）になったな。

そして、久秀は夏美の腕を再度握り締めて「・・・‘卿は本当に今のままで満足かね？’」と楽しそうに問いかけた。

止めてくれ・・・。

と同時にさらに追い打ちを続けるかの如く「‘一度闇に堕ちた者はなかなか抜けられないものなのだよ。
其れは、欲望にも似ているようなものだ。’」

止めてくれ・・・。

「‘卿は求めている。闇の深い所にいる自分自身を・・・。’」

止めろッ！

此れ以上かき乱すな・・・・！私の心を！！

そして夏美は中々動けずらい体を駆使して翡翠刀を抜き久秀に斬りかかろうとした。

だが、香を事前にかがされたせいかうまくいかなかった。

久秀はその様子を見てククと楽しそうに笑い「・・‘やはり、効果来てるようだね。’」と同時に

「‘その香は過去の自分を呼び醒ます効果もあるのだよ。’卿はいやでも戻る様になるさ。」

楽しみだ・・実に楽しみだ。

夏美はそれを聞いて口をかみしめて翡翠刀を自身に目掛けて斬りかかった。

痛みで其れを消そうとした。

久秀はそれを見て楽しそうに再度「・・ほう。」

夏美は顔しかめつつも「・・‘私戻らない！絶対に！！闇の頃の自分絶対に！！！’」

すると雷がドカーンと落ちた。

久秀はその音を聞きククと笑いながら「・・‘どうやら、独眼竜達が来たようだな。’」と呟いた。

夏美はそれを聞いて中々言う事聞けない体を動かしつつも政宗達の所に向かう。

だが、其れを久秀が阻止した。

「何故邪魔をする！？」

久秀は楽しそうに「・・・、言ったはずだ。私は卿を逃がすつもりはないと。」

すると同時に「松永ァァアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！」と双竜の叫び声が聞こえた。

久秀はそれを聞いて楽しそうに笑っていた。

第１１章。石田三成との対立後、夏美に早速危機。完。

第１１章。石田三成との対立後、夏美に早速危機。（後書き）

無事に更新完了致しました。

有難うございます。

其れではほぼ毎回？予告風をどうぞ。

アレから大坂から奥州へ帰還最中に不運にも久秀につかまってしまった夏美。

その報告を聞いた政宗達は、夏美を取り戻すべく久秀の所へと向かって行ったのであった。

久秀はその様子を見てフッと笑い「ごきげんよう！独眼竜とその右目！卿らが来るのを待っていたよ！」

と同時に「相棒ォオオオオ！！何処だ！！！？何処にいる！？」

夏美はその声を聞き「来るなッ！！！相棒ッ！！‘この男（ヒト）は私しゃア達が戦ってきた奴らとは一味違うッ！！！！！！！’」

寧ろ・・かかわるなと警戒音が頭の中に響く・・・。

すると政宗が前に出てきて「Ｈｅｙ！松永のオッサン！‘俺の部下返してもらうぜ？Ｙｏｕ　ｓｅｅ？'」

久秀はそれを聞いてフッと笑い「・・‘私が簡単に返すとでも思うのかね？独眼竜。’」

と同時にワカバのメンバーを見て指を鳴らす準備をした。

政宗はそれを見て軽く舌打ちし「逃げろッ！ライカ！！美零っ！！」

と同時に夏美も振り向き「止めろッ！！！！」

‘此れ以上私から奪うなッ！！’—

だが、久秀はそれをあざ笑うかのように指を鳴らした。

ライカ達に爆風が襲う。

夏美はそれを見て空に向かって叫んだ・・・。

と同時に‘何かが吹っ切れた。’

ライカ「第１２章。奥州の双竜そしてワカバ松永久秀の所に乗り込む。そして・・・。」

「次章も宜しくね。」

以上です。有難うございます。

第１２章。奥州の双竜そしてワカバ松永久秀の所に乗り込む。そして・・。（前

橘：ご観覧頂きありがとう！そしてほぼ毎回何時もの通り長丁場の残酷シーン等あり予定なのは御了承願いたい。

メ：ざっと今回の話を説明させてもらうと・・・・。

ラ：大阪城で石田三成と対峙した私達はさきに相棒（夏美）を奥州へと帰還するようにした。

だけど・・相棒は奥州帰還途中に何と・・政宗様と片倉様に‘危険と言われていた。’戦国の梟雄松永久秀という男にかっさられてしまったんだ。汗

メ：そして、私しゃア様達は伊達の旦那様方と共に姉さんを助けるべく・・

向かったのだが・・・・。

美：夏美様ご自身に再度危機が続いていらっしゃったんだそれと・・私達にも

・・。

メ：其れでは！第１２章。スタート！

第１２章。奥州の双竜そしてワカバ松永久秀の所に乗り込む。そして・・。

アレから大坂から奥州へ帰還最中に不運にも久秀につかまってしまった夏美。

その報告を聞いた政宗達は、夏美を取り戻すべく久秀の所へと向かって行ったのであった。

久秀はその様子を見てフッと笑い「ごきげんよう！独眼竜とその右目！卿らが来るのを待っていたよ！」

と同時に「相棒ォオオオオ！！何処だ！！！？何処にいる！？」

夏美はその声を聞き「来るなッ！！！相棒ッ！！‘この男（ヒト）は私しゃア達が戦ってきた奴らとは一味違うッ！！！！！！！’」

寧ろ・・かかわるなと警戒音が頭の中に響く・・・。

すると政宗が前に出てきて「Ｈｅｙ！松永のオッサン！‘俺の部下返してもらうぜ？Ｙｏｕ　ｓｅｅ？’」

久秀はそれを聞いてフッと笑い「・・‘私が簡単に返すとでも思うのかね？独眼竜。’」

と同時にワカバのメンバーを見て指を鳴らす準備をした。

政宗はそれを見て軽く舌打ちし「逃げろッ！ライカ！！美零っ！！」

と同時に夏美も振り向き「止めろッ！！！！！」

ー、此れ以上私から奪うなッ！！，ー

だが、久秀はそれをあざ笑うかのように指を鳴らした。

ライカ達に爆風が襲う。

夏美はそれを見て空に向かって叫んだ・・・。

と同時に、何かが吹っ切れた。，

と同時に夏美の体に炎と雷が舞う「炎雷殺（えんらいさつ）」になった。

炎殺の最終モードみたいなもの。

そして翡翠刀を取り出し自身に傷をつけて体を動かせるようにした。

久秀を睨みつけて「松永ァアア！！！てめえは許さねえ！よくも相棒達を！！やってくれたなあああ！！！」

久秀はそれを見て楽しそうに笑って宝刀を取り出し「いやはや・・・私は、‘卿だけは傷をつけたくなかったんだが、致し方がない。こうなったら疼くでも私のものにしてあげよう。’」

たまたま爆風を逃れた美零が夏美自身が炎雷殺になっている姿を見て「・・！いかん！夏美様ッ！お戻り下されッ！」と叫んだ。

夏美は、心の中で・・・‘クソッ！！また私は護れねえのか！？大事な者を！！！冗談じゃねえぞ！！

此れ以上散らし奪われてたまるかってんだ！！！’

夏美の脳裏に浮かぶのは嘗ての父大樹と母楓の笑顔。そして・・・嘗ての婚約者だった隼人の笑顔、

そして、昔のワカバのメンバーの笑顔だった。

‘今度こそ散らせはしねえ！！昔（あの時）の二の舞にさせてたまるかッ！！その為なら私は・・・

自身のこの身を喜んで散らし燃やす覚悟。’

・・・すまねえな。有理。姉さんは・・・・・。

・・・‘例え、この身が灰になろうともワカバの為伊達の為・・・そして橘の本家の為に燃えそして朽ち果てる。お前さんを悲しませると言うことにもつながろうともな・・・。’

夏美は体に炎と雷をまとわせて「喰らいやがれ！！！炎雷爆龍殺！！！！！！」と炎そして雷を竜のごとく回り込んで久秀に向かって放とうとした。

だが、久秀が火薬を夏美の前にまきちらし夏美の視野を悪くすると同時に香を投げ込んだ。

夏美はそれを見て怒り心頭し「卑怯だぞ！！！！」

久秀はそれを聞きフと笑い「‘・・卑怯か其れも結構。’だが、‘卿も其れが言えるのかね？’‘昔の（炎龍）だった頃の卿も卑怯な手口使っていたそうじゃないか？」

夏美はそれを聞いて歯ぎしりをし「・・・‘アンタどこまで知っている！？私の闇の過去をッ！！！！’」

久秀はフフと笑い「・・何、‘メイラン’って者に聞いたのだよ。」

夏美はそれを聞きギリと再度歯ギリしりをして「メイランッ・・・メイラン・・・・メイラアアアン！！

あの女！！余計な事をッ！！！来ていたのか！！！許さないッ！！許さないっ！！松永！アンタを倒して

あの女を散らすッ！！！！」

美零はそれを見て軽く舌打ちし「・・・あの男、余計な事を・・・。」

一方、大和にあるある高台。其処には何と石田三成がいた。

炎雷殺状態の夏美を見て楽しそうに笑い「・・・‘やはり奴は私と同じだ。’」

ー‘憎しみそして怨みに生きそして、散る’ー

「・・・‘やはり欲しいな。’」と呟いた。

と同時に夏美の体に黒い風が舞って包んで行った。

久秀はそれを見て楽しそうに「・・ほう。」と呟き三成も「・・・‘奴が来るか（黒煉）’」

そして黒月を持ちながらタバコに火を灯し「いや～参ったね。まさか夏美が此処まで怒るとは思わんかった。が・・予想の範囲内だったか。」と言いながら久秀を見て「・・松永さんとは‘私としては初めましてかな？’」

久秀は楽しそうに「・・卿は‘黒煉’かね？」

黒煉事周王崎渚。

渚フッと笑いながら黒月を鞘から取り出し「‘その通り、黒煉事周王崎渚。以後おみしりを気を。’」

と続け様に苦笑いして「・・‘ま、私もさあんまり野暮な事は好きじゃないのよ。面倒だからさ・・

悪いね？’」と言いつつ真剣な顔になり「・・‘此れ以上こいつ（夏美）苦しませたくないんでな・・

とっとと終わらせてもらうよ。’」と殺気も込めて言った。

久秀はそれを聞いてククと楽しそうに笑い「‘卿に其れができるのであればね？’」と言った。

黒煉はその言葉を聞いて眉をひそめ「・・・一体、どう言う事・・」だと言いそうになった次の瞬間。

黒煉の体（本体）が久秀の後ろにあった。

黒い長髪そして全身黒ずくめで覆われていて右腕には黒い竜の刺青が施されていた。

・・・！間違いねえ！ありゃ、私の‘体（本体）だ。’しかし、何故この戦国（時代）に！？

・・まさか。広州の奴らが飛ばしたのか！？

すると・・・・渚の中で・・・。

ー黒煉ッ！！！待てッ！早まるなッ！！！ー

夏美の声がした。

ーいくら其れが例えお前さんの本体（体）としても、一応警戒はしておいた方が良い。あの男（ヒト）は

そう簡単にやすやすと返しはしないさ。と言うより、私しゃアの勘だとこの男（ヒト）は・・本気（マジ）でヤバイ！！ー

渚も頷きボソと言い「‘了解だよ。相棒。’」と言い黒月を鞘から取り出した。

「例え、‘其れが私の本体（体）としてもだ。もしかしたら罠と言う可能性もあるだろう？’」

久秀はそれを見てとても楽しそうに笑っていた。

「さて、‘少々卿にも御相手願おうか・・・。’」と呟いた。

黒煉は再度黒月を構え直して「・・・・黒煉。いざ参ります。」と言い久秀に向かって突進していった。

第12章。奥州の双竜そしてワカバ松永久秀の所に乗り込む。そして・・・。完。

第１２章。奥州の双竜そしてワカバ松永久秀の所に乗り込む。そして・・。（後

ご観覧頂きありがとうございます。無事に更新完了致しました。

有難うございます。

では、ほぼ毎回のグタグタ予告風をどうぞ笑

あれから、夏美は黒煉と入れ替わり久秀と対立していた。

と同時に何故かしらんが久秀の後ろに黒煉の体（本体）があった。

だが、例え本当だろうがうのみをせずに久秀へと突進していった。

「ハアアア！！！！喰らいなッ！！！黒月流神派！！！！！黒鴉！！（くろがらす）！！」と黒い光が鴉の形をして久秀に襲いかかる。

が、久秀はフッと笑い火薬を取り出しばら撒き着火して黒煉の行く手を遮る。

黒煉は心の中で舌打ちした。

ー‘この男出来るしかも侮れない’汗ー

黒煉は額から出た汗を頬に流れたのに気付き手の甲で拭う。

そして「黒月流神派・・・奥義！黒朱雀！！！！！」と久秀に斬りかかった

だが、自身が傷ついていたことに気が付いた。
いつの間にか久秀が奥義を軽くよけながら斬りかかっていた。
其れが当たっていたのだ。
すると慌ててメグナが出てきて「・・・！！！黒煉の姉さんッ！！！」
黒煉はメグナの声を聞き「メグちゃん来るなッ！！この男は危険だッ！！！」
と言い放った。
そして久秀は楽しそうに「どうしたね？もう終わりかね？」と言った。
黒煉はニヤリと笑い「・・・‘否終わりじゃないさ。’」と呟いた。
そして、黒月の刃を天に掲げて・・・慎重に精神を集中して円を描いた。
美零はそれを見て小声で「・・・‘来るね。あれが・・・黒鴉そして、黒鳳凰よりも厄介なあれが・・・。’」と黒煉を見て言った。
「黒の満月の下！！毀れ（こぼ）！そして天から唸れ！！！轟け！！黒月流神派！究極最大奥義！！黒龍月光！！！（コクリュウゲッコウ）」
黒月がまるで龍の形になり光久秀に攻撃をした。

通常此れを喰らってまともに立てる者はいない・・いないのだが、
久秀は例外らしく多少の傷は追ったものも無事だった。
黒煉はそれを見て驚愕し「・・うそだろ？」と呟き黒月を地面に突き刺し
ガクっと片膝をついた。
其れは美零もメグナも同様に驚愕していた。
久秀はそれを見てフッと笑い「‘危ない危ない。’」と呟いていた。
美零「第１３章。松永ＶＳ黒煉・・そして・・。」
「次章も宜しく頼む。」
以上です。有難うございました。

第１３章。松永ＶＳ黒煉・・それを見守る美零達。（前書き）

今回もご観覧頂きまして有難うございます。

美：感謝する。今回は、前章と同様に夏美様の体に宿っている黒煉が夏美様の体を借りて戦国の梟雄松永久秀と対立している所から始まる予定だ。

メ：私しゃア様達の世界では嘗ての闇の始末屋の女王と呼ばれた黒煉の姉さんも

あの旦那さん相手に奮闘しつづけていたみたいね汗

橘：・・あの兄さんスンごい危険だ汗私の心を・・かき乱す汗

言い忘れたけど今章も残酷シーン等あり予定だから宜しく。

ラ：（タバコに火を灯し）では、第１３章。開幕だ。最後まで御付き合いの程どうぞ宜しく！

第１３章。松永ＶＳ黒煉・・それを見守る美零達。

あれから、夏美は黒煉と入れ替わり久秀と対立していた。

と同時に何故かしらんが久秀の後ろに黒煉の体（本体）があった。

だが、例え本当だろうがうのみをせずに久秀へと突進していった。

「ハアアア！！！！喰らいなッ！！！黒月流神派！！！！！黒鴉！！（くろがらす）！！」と黒い光が鴉の形をして久秀に襲いかかる。

が、久秀はフッと笑い火薬を取り出しばら撒き着火して黒煉の行く手を遮る。

黒煉は心の中で舌打ちした。

ー‘この男出来るしかも侮れない’汗ー

黒煉は額から出た汗を頬に流れたのに気付き手の甲で拭う。

そして「黒月流神派・・・奥義！黒朱雀！！！！！！」と久秀に斬りかかった

だが、自身が傷ついていたことに気が付いた。

いつの間にか久秀が奥義を軽くよけながら斬りかかっていた。

其れが当たっていたのだ。

すると慌ててメグナが出てきて「・・！！！黒煉の姉さんッ！！！」

黒煉はメグナの声を聞き「メグちゃん来るなッ！！この男は危険だッ！！！」

と言い放った。

そして久秀は楽しそうに「どうしたね？もう終わりかね？」と言った。

黒煉はニヤリと笑い「・・・、否終わりじゃないさ。，」と呟いた。

そして、黒月の刃を天に掲げて・・・慎重に精神を集中して円を描いた。

美零はそれを見て小声で「・・・、来るね。あれが・・・黒鴉そして、黒鳳凰よりも厄介なあれが・・・。，」と黒煉を見て言った。

「黒の満月の下！！毀れ（こぼ）！そして天から唸れ！！！轟け！！黒月流神派！究極最大奥義！！黒龍月光！！！（コクリュウゲッコウ）」

黒月がまるで龍の形になり光久秀に攻撃をした。

通常此れを喰らってまともに立てる者はいない・・いないのだが、

久秀は例外らしく多少の傷は追ったものも無事だった。

黒煉はそれを見て驚愕し「・・・うそだろ？」と呟き黒月を地面に突き刺し

ガクっと片膝をついた。

其れは美零もメグナも同様に驚愕していた。

久秀はそれを見てフッと笑い「‘危ない危ない。’」と呟いていた。

馬鹿な！！！アレ喰らってまともに動ける奴何ざァ基本的にいねえんだぞ！！！

クソッ！！一か八か‘アレにかけてみるか・・・’。そして黒煉は傷ついた体を起こしつつ心の中で、

すまねえ。夏美。体もうしばらく貸してくれ・・そして傷つく事許してくれ。

と夏美に詫びつつ黒月を前に構えて手で印を結び刃の部分を撫でた。すると刃の部分が黒く染まった。

メグナはそれを見て大慌てして美零に「美零の姉さん！黒煉の姉さん多分‘アレやるつもりだ！！’」

メグナのその報告を聞いて美零は冷や汗かきながら軽く舌打ちして「・・・‘みたいだな。だが、今の状態でアレやると・・・姉さんも夏美様の体も持たんぞ！！！’」

その会話を聞いていた政宗達は驚いていた。と同時に美零は小十郎と眼が合いそして・・・。

「小十郎！！政宗様を安全な場所へお連れした方がいいと思うわ！！！さっきよりの大技が来る！！！其れは周りの者たちも爆風風で巻き込む可能性もあるから！！」と言った。

小十郎はそれを見て驚き政宗に安全な場所へと誘おうとしたが、

「・・・あいつが、必死で戦ってんのにのこのこと安全な場所へと行けるか。」と政宗は拒んだ。

小十郎はそれを聞いて只黙っていた。主決めた事をとやかく言うつもりもないし寧ろ・・政宗は自分が決めた事を曲げない性格だって事一番彼が知っていたのであった。

美零はそれを察したのかタメ息をつきあまり近くに行かないようにねと忠告をして再度黒煉達に眼をやる。

黒煉は軽く舌打ちして心の中で・・・本当なら限界だがな。致し方ねえ。そして刃を天に向けて潔く振りながら「喰らいな！！黒月流神派究極最大奥義！！！黒龍月！！！（こくりゅうづき）！！！」と久秀に

向かってはなった。だが、其れもいとも簡単に敗れそして火薬を巻かれ火を放たれた爆風と共に黒煉（夏美）の体が壁にぶつかって行った。

と同時に黒煉から夏美へと‘戻って行った。’

夏美は顔しかめて汗を流し首を一横振りし体を起こした。

そして、タバコに火を灯し「・・・‘黒煉の奴でも叶わなかった何てな・・。’」いやぁ、参ったね。

と苦笑いして久秀を見て言った。

少々侮っていたかな。と呟きつつも自身の体を起こし、翡翠刀とは別の刀紅月を鞘から取り出し

「‘こいつは使いたくなかったんだがな・・松永さん相手だと仕方ねえか。」と呟いた。

小十郎はその様子を見て驚き「‘あいつまだ戦うつもりか！？’」

と同時に美零は顔しかめつつも「・・・‘あのお方はそう言うお方’」と悲しそうに呟き「ライカから聞いた話では・・御両親がそして、婚約者が散ってからずっとあんな感じなのよ。’」

その事を聞いて小十郎は「・・夏美。」と呟きそして心の中で・・

なあ、夏美。お前ェはその‘小さき背中で一体何を背負い込んでいるんだ？’

それは、政宗も狂も同じだった。

久秀はそれを見てフッと笑い「・・‘まさかその傷だらけの体で私に勝てるとでも思っているのかね？’」

夏美はニヤリと笑い「‘勝てるかどうかはやってみなくちゃ分からない。’」

久秀はそれを聞いて「‘卿は何の為に戦っている？’」

夏美はタバコを再度口に加え直しながら「・・‘己（自身）の宿命（サダメ）そして、己（自身）の過去の鎖を断ち切る為に。・・そして‘伊達の天下の為に！！’」

政宗達はそれを聞いて驚いた。

と同時に何とか爆風からいつの間にか脱したライカ達も合流してライカはフッと笑いタバコに火を灯して

「・・‘あいつらしい答えだな。’」

久秀はそれを聞いてフッと笑い「・・‘偽善だな。’」と一瞥した。

夏美はそれを聞いてニヤリと笑い「・・‘悪いね。私しゃアはこう言う生き方しか出来んもんでな!!’」

と同時に「紅の月の門の下一つ!!紅月流神派・・・・紅鴉!!（ベニガラス）!!」

と久秀に向かって攻撃していった。

・・例え、‘偽善だと思われてもかまわん!!此れが今の私の生き方!!ワカバそして伊達、本家の為に生きそして散る!!!’此れが私の生き方（やり方）だ。

ライカはそれを見てフッと笑いながら「・・・‘暴れても良いがあまり無理すんなよ？相棒。’」と呟いていた。

久秀はそれを見てフッと再度笑い火薬を夏美の前にばらまいた。

夏美はそれを見てかわして久秀の懐に入る。「ハアァアア！！紅月流神派！！紅龍月！！」

だが、風魔に一撃喰らわせられた。

夏美の体がぶっ飛んだ。

ライカは其れを見て「相棒！！！！」と叫びながら夏美の所に向かって行った。

夏美を起こしつつ「大丈夫か？相棒？」

夏美頷き苦笑いして「ああ・・何とかな。」と息を少々切れながらもライカを見て言った。

すると、メグナが夏美の前に現れて風魔を見て「・・・‘忍びは忍び同士仲良くやり合おうじゃないのさ。’ねえ？風魔の旦那さん？」そう言い翡翠のクナイを取り出して「・・・‘普段温和かな私しゃア様も流石に姉さんやられて悪いけど黙っていられないんだな・・・此れが。’」と真剣な顔で‘すっかり仕事モード’に突入していた。

其れを見た夏美は苦笑いしつつ「あ～あ・・メグナの奴切れちゃってんな。」

ライカは其れを見て心配そうに「・・だとしても、相手は‘伝説の忍び’さんだ。メグちゃん相手務まるかな？」

夏美フッと笑い「・・‘ま、何とかなるだろ。あいつは、ああ見えて戦闘には優れた能力持ってるからな。’」

・・頼んだぞ？メグナ。

一方、風魔も其れを見て刀を準備する。

メグナ再度クナイを持ち「・・・・・ワカバ兼橘忍び隊組長。形川メグナ。いざ忍び参ります！！」

そして風魔に突進して行った。

風魔も其れに答えて応戦する。

メグナの素早さを見て久秀は楽しそうに「・・ほう。あのクノ一見かけによらずやるな。」

あの風魔と対峙してもものともしないとは・・・いやはや、感心感心。

と心の中で呟いていた。

第１３章。松永ＶＳ黒煉・・それを見守る美零達。完。

第１３章。松永ＶＳ黒煉・・それを見守る美零達。（後書き）

有難うございます。

無事に更新完了致しました。

其れではほぼ毎回の予告風をどうぞ。

アレから、久秀と対立しつづけた夏美（黒煉と入れ替えつつも）だが、其処は戦国の梟雄だ。一筋縄ではなかなかいかない相手だ。

黒煉は、大技だしつつも久秀に人達も与えられずに逆にやられてしまい尚且つ案の定夏美と入れ戻ってしまったのだ。

一方、自身の傷ついた体を駆使しつつも再度久秀に挑むが、伝説の忍び風魔によって返りうちにされた次の瞬間にメグナが現れて風魔と対峙する事になった。

メ：「第１４章。風魔ＶＳメグナ。」

「次章も楽しんでね～。」

以上です有難うございました。

第１４章。風魔ＶＳメグナ。（前書き）

ご観覧頂きありがとうございます。

メ：はいはい～と。今章はこの私しゃア様形川メグナをメインとして動く・・・

予定よ↑

ラ：何だい？その間は笑；

美：此方も此方で長丁場と残酷シーン等あり予定なので御了承願いたいが、

今回のメグの相手はあの伝説の忍び・・・流石に一筋縄ではいかんと思うが・・

メ：ま、その結果はとりあえず見てからのお楽しみって事で♪

橘：・・・（頭抱える笑；）

メ：何はともあれ第１４章開幕よ～。

ラ：最後までどうぞごゆるりと。

第１４章。風魔ＶＳメグナ。

アレから、久秀と対立しつづけた夏美（黒煉と入れ替えつつも）だが、其処は戦国の梟雄だ。一筋縄ではなかなかいかない相手だ。

黒煉は、大技だしつつも久秀に人達も与えられずに逆にやられてしまい尚且つ案の定夏美と入れ戻ってしまったのだ。

一方、自身の傷ついた体を駆使しつつも再度久秀に挑むが、伝説の忍び風魔によって返りうちにされた次の瞬間にメグナが現れて風魔と対峙する事になった。

お互いの刀の音そしてクナイの音が響き渡る。

メグナ軽く内心舌打ちして・・・。

・・・流石は、伝説の忍びね。私しゃア様何となく（な～んと）だけどその理由が分かっちゃった気が

するのね。

だけど・・・このままクナイで戦うのは限界もあるか・・・よし。

メグナ発破かけて手で印を結びヒュウと息を吹き「形川忍法、霧妖！」目をくらませて後分身して

一気に風魔に攻撃を仕掛けた。

だが、風魔は風を起こしてメグナの分身を消しメグナを吹き飛ばした。

夏美はそれを見て「メグナ！！！」

メグナは激突した壁から起きあがりながらも苦笑いして「いやはや・・参ったね。此処まで強いとは思ってもみなかったわ。」

私しゃア様かなり驚いたよ。と呟いていた。

しかし、メグナも橘クノ一としての長としての力量があった。

「・・・だけど、‘私しゃア様も引けない理由があるのでね。’」

と再度今度は刀を取り出して風魔に向かって構え直した。

夏美は顔しかめつつも「もういい！止めろメグナ！！！！」と叫んだ。

メグナは夏美を見て何時ものように気楽に「大丈夫よ～。姉さん。さっきはてこずっただけだからさ。

其処で見ててよ。」と言った。

夏美はそれを見て軽くため息をつきタバコに再度火を灯しながらメグナを見て「・・・‘無茶するなよ？’」と言った。

メグナは其れを聞いてフッと再度笑い「了解っと。」と言いながら両手をパンと叩き再度分身作って

「形川忍法・・・火炎分身爆風烈風弾！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2927q/

戦国BASARAで奥州の独眼竜に仕えている右目と紅の鬼そして・・ある衝動そ

2011年11月13日13時37分発行